

# 地研通信

発行人 長友 薫輝  
編集人 田中 里美  
発行所 三重短期大学  
地域問題研究所  
津市一身田中野157番地  
〒514-0112 電話(059)232-2341  
題字 岡本祐次元学長

## 第49回地域問題研究交流集会報告(要旨)

2014年10月4日(土)の午前10時から三重短期大学41番教室において第49回地域問題研究交流集会在三重県福祉セミナーとの共催で開催されました。

本会は午前の部として大津市社会福祉協議会の山口浩次さんによる基調講演「相談からまちづくりへ～がんばらないけどあきらめない～」と午後の部のシンポジウム「声なき声へのアプローチ～支えあうまちをめざして～」で構成され、高齢・障害・児童福祉関係者、社会福祉協議会職員、行政職員、民生・児童委員、生活困窮関係者やその他関心のある方などが参加しました。

～今回の地研通信では午前の部の基調講演と午後からのシンポジウムの様子を掲載します。～

### <司会>

皆さんおはようございます。

本日は「第11回三重県福祉セミナー」そして「第49回地域問題研究交流集会」にご参加いただきましてありがとうございます。

今回は「声なき声へのアプローチ、支え合うまちをめざして」ということで、地域に潜在している、何らかの理由で声を上げることができない方々へのアプローチをはじめ相談活動を支える体制作りについて、午後のシンポジウムを含めて支え合うまちづくりに関わっておられる方々に語っていただき皆さんとも交流させていただければと思っております。

それでは三重県福祉セミナーの実行委員長で地域問題研究所所長の三重短期大学教授の長友薫輝先生から開会のご挨拶をいただきます。

### <長友>

おはようございます。お忙しいところ多くの方にご参加頂きありがとうございます。

初めてご参加の方には今後とも是非お付き合いいただけたらなと勝手ながら思っております。今回は三重県福祉セミナーというものと三重短期大学の研究所である地域問題研究所の共催という形で開催いたします。午前と午後の長時間になって恐縮ですがお付き合いいただければと思います。

それでは、午前の部ということでさっそく講演に入りたいと思います。

基調講演の「相談からまちづくりへ～がんばらないけどあきらめない～」とタイトルで大津市社会福祉協議会地域福祉課長の山口浩次さんからお話をいただきます。

タイムテーブルは、このあと11時半までお話をいただいた後、皆さんから感想を含めてご意見等をたまわれればということで交流を進めたいと思います。

それでは山口さんよろしくお願ひします。

### <山口>

皆さんおはようございます。ご紹介いただきました山口です。ようこそ三重県福祉セミナーにお越しいただきました。ありがとうございます。

私は今回で3度目、津市の皆さんにお声をかけていただきまして、ご縁があり実践報告をさせていただくチャンスをいただきました。今日はいろんなことを皆さんにお伝えして何か一つでも皆さんの心に残ることになればなと思っておりますのでよろしくお願ひします。

では、最初に座ったままでできる体操から始めます。長生き体操と言いまして大津市ではこの体操で長生きする人が続出ですので津市にも広めたいと思います。座ったままでできる体操グッと背筋を伸ばします。

グッと伸ばしてゆっくり下ろします。これだけの体操です。背筋を伸ばしてゆっくり息を吐きながら6秒7秒かけて下ろします。息を長く吐きますので長生き(息)体操とよんでいましてこれをやって20年くらいが経ちます。今はロングブレスダイエットも流行っていますね。ちなみに私は糖質制限ダイエットで8キロ減に成功しました。皆さんもメタボを気にしていられる方は糖質制限用のビールを飲む、そしてご飯はできるだけ食べずに野菜中心の食生活、お肉は食べても大丈夫なんですけれどもこれで8キロ痩せましたので、私はロングブレスダイエットと糖質制限ダイエットが効いています。

皆さんはどんなものが効いているでしょう？

もう一つ、息を吐くというのがすごく健康に良いそうです。何か困ったときに息を吸う癖のある人は気を付けて、困ったときにはフーッと吐くのが良いそうです。

そしてもう一つ私はワッハッハ健康体操というものをしていきます。子どもは1日に300回くらい笑うと言われていますが、私たち大人は1日平均20回笑うでしょうか？今日は20回笑うのと同じ効果のあるワッハッハ健康法と一緒に進めます。皆さん恥ずかしがらずに私と一緒にやりたいと思います。その場で結構です。ワッハッハ、ワッハッハ、ワッハッハ、イエイ(笑)いいですか？健康になると信じてワッハッハというのを面白くもないけれどワッハッハと笑うこれで行きます。ありがとうございます。ワッハッハが健康に良ということで今、大津市内でワッハッハ健康体操ということで広がっていきまして、吐くという動作が私たちにとっても良いことです。



今日の私の話はいろんな人の相談に乗ってきた話をします。相談に乗るのはとても怖いし、その人の人生に触れる場にいるわけですけど、その時にゆっくりと息を吐きながらその方の話を聞かせていただいて一緒になって這い上がるそんなことしてきましたので、そんな話を皆さんにお伝えさせていただきたいし、ここにいる皆さんは日々どういうことをしていられる方も多くいると聞いていますので共有できる時間が持てたらと感じています。

今日は私、一人後輩を連れてきました。大津市社協は31名の職員がいて、こういう形で他市に呼ばれるときは後輩を連れて行くというふうにしています。できるだけ男性も女性も連れて行きます。けれど、宿泊の時には男性を日帰りの時には女性をというふうにしていて、今日は日帰りですが男性を連れてきました。

1年目の職員です。自己紹介をしてもらいます。(拍手)

#### <大津市社協職員Uさん>

大津市社協で地域支援グループに所属しております。Uと申します。今日は素敵なお縁があると聞いて山口課長についてきました。

出身は長崎なのですが幼いころには三重県鳥羽市で数年過ごしたので親近感を感じています。

入社して半年経ち、毎日、大津市社協でよかったなと感じております。いろんな専門職の方をはじめ警察の方ですとか社協でしかかかわれない人と出会えて本当のよかったなと感じています。また地域の方ですとか相談者の皆さんから本当にたくさんのことを教わってありがたい時間をいただいているなと感じています。

私は今22歳ですのであと40年近くは大津市社協にいます(笑)。新米なので山口課長から盗みながら、また今日参加して下さっている皆さんからもいろいろ盗めたらいいなと思っています。どうぞよろしくお願いします。

#### <山口>

皆さん聞いていただいてありがとうございます。

私たちは人前で話して皆さんに拍手をもらって成長する職種ですので彼も連れてきてまずは拍手をしました。

後程もう一度、彼の登場があります。話の中にも出てくるんですけども弱さの情報公開というのが私の一つのキーワードです。今日は皆さんも私の話の真ん中あたりで少し弱さの情報公開の体験をしていただこうと思います。そんな中に彼も一つエピソードを話す機会をいただいていますのでよろしくお願いします。



最初に資料の説明だけしておきます。

今日使いますのはパワーポイントの冊子になった“相談からまちづくりへ”という資料と“相談から生まれた24の「プロジェクト」”これを使わせていただきます。

そしてもう一つハンドブックで“知的障がいのある人が地域で安心して暮らすために”このハンドブックのことを説明してくれている資料が新聞の記事にあります。朝日新聞の記事で“知的障害者守る手引書広がり”とあります。

この手引書は天津社協に相談に来られた一つの事例を手掛かりにこういうことが世の中にはきっといっぱいあるだろうということでそのことを解説した手引書です。



知的障がいの人が大津で走っている京阪電車内で痴漢容疑で逮捕されました。彼はもちろん痴漢はしていなかったんですが痴漢の容疑で逮捕された彼を守るために支援しているときに弁護士さんが使う言葉が、あまりにも私たちの日常で馴染のない言葉であったことから「逮捕」とか「拘留」とかそのあたりのことをまとめようと話して3年かけて作ったパンフレットです。

私たちはこれを大津市内の交番所と警察官に配って歩きました。警察官に知的障がいを持っている人の特質「お前痴漢やっただろ！触っただろ！」と言ったら「ハイ」と答えてしまう弱い人たちが世の中にいるということをまずは警察に知ってもらいたい。それと親御さんたちに何か起こった時には「助けて」と言ってくださると私たちや弁護士が助けに行くということを書きました。

それとどの時点で専門職が警察に行けば彼を助けることができるのか。中には実際に万引きをしてしまう知的障がい者もいらっしゃるりでそういう方の反省をどう聞き出すのか、そんなことを時間をかけて作ったパンフレットです。

一旦このパンフレットはすべて売り切れになったんですが、国の科研費をいただきまして大学の先生たちともう一度リニューアルをしたのがこのパンフレットです。

もし皆さんの関係者の中でこの冊子もう少し欲しいという方がいらっしゃれば是非連絡してください。

100部、200部送ることができます。この冊子が大津だけではなく津に皆さんのお役にも立つことができればと感じて持ってきましたのでよければこれを活用して下さい。

そしてもう一つこのパンフレットに挿絵、マンガを入れました。やっぱり難しいパンフレットでは目につかないので。そしてこの挿絵はご自身の子どもが知的障がいを持つ高阪さんという大津在住の漫画家に描いていただいて彼女とコラボすることでこのハンドブックがグッと身近なものになりました。

私たち天津社協の権利擁護研究会のメンバーは各地でパンフレット普及の為によばれまして各府県の総会とか研究集会でこのパンフレットのことを触れているところです。先日は「週刊朝日」にも取り上げていただきまして、これからも今日のテーマにある声にならない声を聞き続けてそのことを形にするそのことに私たちはこだわって行きたいんです。その中の一つ小さな成果がこのパンフレットなので是非お手に取ってみてください。

もう一つ“第3章事例、今日的な社協活動事例、生活困窮・社会的孤立防止の取り組み”という資料があります。

この資料どこから印刷してきたか書ききれていなかったのでも“2014年「ボランティア白書」”からと書いて下さい。今年の「ボランティア白書」に私が書いた文章が載ったものです。このもとになったものが去年の「月刊福祉」の記事“総合相談から広がる社会福祉協議会活動”というものでこれもまた見ておいて下さい。

“大津市社協第4次地域福祉活動計画”という資料もつけておきました。この計画中身もさることながら素敵なのは裏なんです。“目指せ！笑顔をつなぐ達人”ということで私たち職員の顔が載っています。

人口34万の大津市で31人の職員というのは介護保険をしていない社協としても少ない人数の地域福祉活動をしている社協の取り組みです。この職員たちが笑顔をつなぐ達人として地域福祉に取り組んで皆さんの地域で働いている職員たちと変わらない笑顔で働いています。

真ん中の「ソッタとドウジ」というキャラクターの下に丸坊主の“熊やん”が写っていますけれど、彼はこの4月12日に天国に引越されました。彼の話が今日は出てきますので私の口から“熊やん”の話が出てきたらこの丸坊主の彼のことなんだなと受け止めていただけるとありがたいし、私たちが相談活動を大事にしている意味が皆さんに伝わるためにも彼から学んできたことをお伝えしたいと思います。

彼から学んできたことが「月刊福祉」に載り「ボランティア白書」に載り全国各地に社会福祉協議会がしっかり相談を受け入れるんだということが広がっていくと良いと感じていますので皆さんの心の中に何か残ることがあればいいなと感じています。資料の説明はこれで終わりです。



少し自己紹介をします。私は子どもの頃にタイガーマスクという漫画を読みまして、大きくなったらタイガーマスクになりたいと思ったんです。タイガーマスクに出てくる児童養護施設で働きたいと思ったものです。タイガーマスクはプロレスで稼いだお金でちびっこハウスという今でいう児童養護施設にクリスマスなどにプレゼントをするんですけども、そのプレゼントを喜ぶケンタ君という少年が出てきて私は子

どもながらに大きくなったら子どもたちのために仕事をしたいなと思って過ごしてきました。

大学生になって児童養護施設でアルバイトをしたときに一番大事な親から離れて暮らす子どもたちの心の闇、辛さというものを感じる中でこの子どもたちを守るとともにこういう子どもたちにしないためにも地域で活動する地域福祉の仕事の魅力にも取りつかれまして、社会福祉協議会という職場があるということを知り平成2年に社会福祉協議会に勤めて児童養護施設とも付き合い、大学時代にアルバイトをしていた児童養護施設を卒業した子どもたちとの繋がりも通して今は強い気持ちで地域福祉の仕事をしています。

私が平成2年に地域福祉の仕事をしたときに強く心に残ったことを一つだけ紹介すると「いつかこういう仕事がなくなる時代が来るといいな」と思ったんです。地域福祉と言わなくても近所の人が助け合って何か困ったことがあったら福祉の制度が利用できて自分でできることは自分でできないことは手伝ってもらえる、そんな時代が来て社会福祉協議会が解散すればいいなと思って働き続けてきました。

今日話をしますけれど、なかなかそういう状況にはないです。むしろ社会福祉協議会やNPOなどのいろんな活動がこれからも求められているし、一人ぼっちで悩んでいる人がたくさんいる状況の中でもう一度支援とか助けるやり方とか、私は助けたいという力をもっと増やしていかないとならないと思いますけれど、そういう状況が広がっているということを感じて私はもうあと10年大津社協でお世話になってがんばろうと思っています。

この後どんな社会が来るのかそんなこともしっかり皆さんと研究しながら私たち大人がどんな状況を作り出せるのか？そんなことを感じています。Uが先ほど自己紹介の時に「あと40年大津社協で働く」と言いました。大津社協は去年60周年を迎えました。Uは僕が大津社協の100周年の記念式典をするので「それまで生きてください」と言うんです(笑)。そういう後輩にも恵まれている私の報告をさせていただきます。



パワーポイントを使って報告するのが良いのかどうかいつも悩むんです。パワーポイントの資料は何か完成しているように見えてしまって私はパワーポイントで話すのは上手くないので、写真だけ最初にパワーポイントで皆さんに見ていただいて資料はパワーポイントなしでいきます。

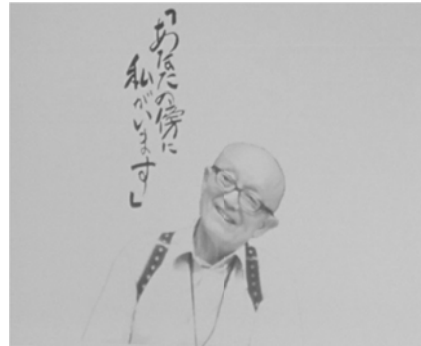
こういう話を後でするんだなという程度で結構ですので、それと私の話は事例なので事例の聞き方、私もいろんな場面で各地の事例を聞くことがあります。事例の聞き方で参考になるのは一つくらいの思いで聞くのが良いといつも感じています。自分たちの取り組みに参考になるのはせいぜい一つ欲張っても二つです。

全部のことをいろいろ聞こうと思うとしんどいので大津と津は地域性が違うし歴史も違うので津で何か参考になるとすれば一つくらいだなと思って気楽に聞いて下さい。私も気楽にしゃべります。

人口は34万人、世帯は13万8千世帯の大津です。県庁所在地というものの京都駅と大津駅があまりにも近いせい京都駅に降りてあの何とも素晴らしい建物を見ると11分で大津駅に着くんですけども大津駅は本当に何もありません。それが良いという県民もいますが私は複雑です。

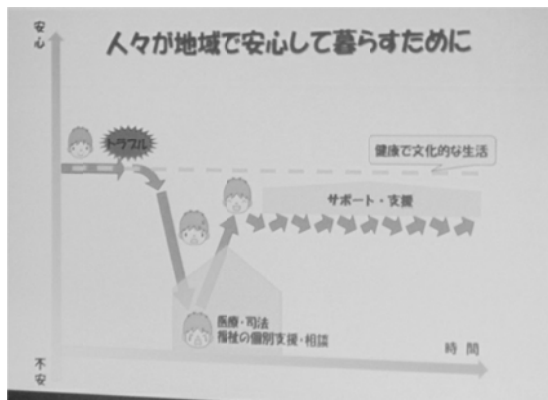
石積みのまちづくりといいまして穴太衆積みといって大きな石にも小さな石にも役割がある。石のまた小さな石や土台となる石がいっぱいあってこれでしっかりした門構えができるし安土城も大坂城も滋賀の大津の穴太衆たちが石を積んだということで、生活困窮者支援をするときも同様に、いろんな人たちがいるということも石積みのまちづくりから私たちがいつも感じています。

写真は津から高島に行く所の白鬚神社です。琵琶湖ですけども海のような景色です。そして、これは比叡山から浜大津のあたりを見た景色です。手前のあたりに浜大津の社会福祉協議会がある建物があります。ここに以前は大津城があり戦国時代の大きな合戦の場所であったことを思い起こしたり、たくさん光を見ながら人が暮らしている場所なんだということを改めて感じこの中にも声にならない声があるということをお今日は皆さんにお伝えします。



写真は「あなたの傍に私がいります」熊澤孝久先生、私の先生で大津社協で平成9年から相談員をされていてこの4月12日に82歳でお亡くなりになった熊澤孝久さんです。彼から教わったことを今私たちはみんなで実践しています。そのことも最初にお伝えします。

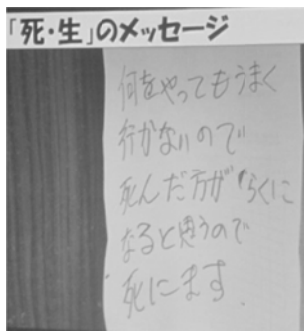
こういうパワーポイントを先生たちと一緒に作りました。健康で文化的な生活のラインがここにあるとすると私たちが色々な場所でトラブルに巻き込まれます。病気になるかもしれないしリストラにあうかもしれない。子どもが高校を中退してしまうかもしれません。いろんな出来事が私たちに待っているそんなトラブルに巻き込まれた私たちはどこかで誰かの力を借りる。いわゆる個別支援の力を借ります。



個別支援の対応をするとほんの少し私たちは上がるわけですが元のところまでは上がりきらないというのが私たちの生活相談なんです。そこで行ったり来たりを繰り返すこのところでちょっとしたサポートや支援があることで繋がっているそんな命が津にも津にも四日市にもあるんだと感じています。それともう一つは日々の暮らし支え合いがあってここで私たちの活動の全体像がこれです。個別支援もするし日常支援もするし地域の中で助け合いの活動をする。これが社会福祉協議会の活動だし地域福祉の活動です。



そこで私は十数年前に出会ったこの張り紙、「何をやってもうまく行かないので死んだ方がらくになると思うので死にます」自分の家のドアに張り付けて家の中に立て籠もった52歳の男性の張り紙です。



彼は発達障がいがあって結婚して子どももいるんですけども妻は障がいを持って入院をしました。2人の子どもたちを育てることができずに児童養護施設にあずけました。彼は働いたらいいのですが仕事が長続きしないし働く場所がないお金がない。

子どもが小学校の頃は校長先生に100円借りて来いと子どもに言わせて生活していたんですけどそれではとても生活が成り立たなくて生活保護の申請に私も3度付き合いました。

けれどやはり十数年前は52歳で働けるのに働きなさいと言われて帰されて彼はこの張り紙を貼って家の中で飲まず食わずで3日間。地域の人が見つけて民生委員さんに知らせて民生委員さんが私の携帯に電話をしてきてくれて救急

車、警察を呼んで部屋に入りました。私もいろんな経験から部屋の中で死んでいるかもしれない人のところへ一人で飛び込まない。民生委員さんにも固くお願いをしています。

第一発見者はその後の取り調べがすごく長く続くので民生委員さんには第一発見者になってもらいたくないんです。そんな思いでいつも救急車を呼び警察を呼び私たちは3番手くらいで中に入ります。幸い彼は脱水症状があったものの生きていましてその後生活保護を受けることができ障がいがあるということもだんだんわかってきました。

この張り紙はその後私が相談活動をしていくときにいつも忘れないでいたいと思う張り紙です。今こういう張り紙をせずに部屋の中で死んでしまう人が津市内で1年間で60人から70人。この自殺はなかなか減らない。津も四日市もこの三重県もおそらく自殺対策の取り組みをされていますが、部屋の外にこうやって張り紙を貼ってくれるといいんですけどみんななかなか助けてと言ってくれずに亡くなっていく。こうした現実を思い起こすためにも、障がいを持っている彼だからこの張り紙を貼ってくれたわけでこういう張り紙を貼ってもらうにはどうしたらいいのか大きなテーマです。



写真の彼女は津社協に相談に来て3日間ご飯を食べていないということでカップヌードルを食べてもらって相談にのっている風景です。

こういう相談風景が津社協では毎日のように繰り返されます。リーマンショックまではこういう相談はひと月に1件あるかないかでした。やっぱり働く場所があったし何とか生きていたし、そういう相談が来たら私たちが机の下からカップヌードルを出したりして彼女たち彼らを支えていたんですけども、今ではカップヌードルやレトルト食品を地域の学区社協の役員さんや民生委員さんをお願いしましてお米は年間約2トン、レトルト食品は何千食と集まりまして彼らにまずは食べてもらってそのあと相談する。



それと年金と年金の間ちょうど10月の今時分は高齢者が上手くお金を使わずに生活できずに市役所に相談に行ってお金貸してほしいという相談があります。なかなかお金は市役所では借りれませんので社会福祉協議会にまわってこられて、

そういう方々にとりあえず次の年金が出るまでこれで生きていてなとそんな感じでこういう食品を使わせてもらっています。

◇

NPOと一緒に越冬支援餅つき大会をしてもう10年になります。もともと共産党の事務所と地域が始めたこの取り組みにNPOが加わり私たちも加わりみんなで越冬支援餅つき大会をしています。これはホームレスの人たちに声をかけてこの餅つき大会に来て貰うんですけれども私たちの取り組みを通してわかってきたのはホームレスの人たちに餅つき大会があるから来てなって言ってもなかなか来ないんです。

今まで人の支援を断っていたのには理由があって言うに言えないことがいっぱいある。誘いかけの言葉の中でこれが良いんだなと思ったのが「餅つき大会の餅のつき手に困っているから来て」と言わせてもらおうと来てくれる場合もあります。餅をついてお米やいろんなものを持って帰ってもらってそれから相談に繋がるそういう方々が多くいらっしゃいます。

後にも出てきますがこのホームレスで社協に繋がり、共産党の相談に繋がり生活保護に繋がりそのあとやっぱり社会的に孤立してしまうのではなくて、そういうもとホームレスの人たちがサロンを作ってそういったサロンを通して元ホームレスの人たちが「自分たちも夜回りをしたい」と言ってくれまして、今月は元ホームレスの皆さんと夜の10時から12時まで琵琶湖の周辺でホームレスをしている人たちに声をかけに行きます。

なんで夜の10時から12時にするかというと夜の10時までにはイオンにいたり平和堂にいたり、いろんな明るいところで過ごしていますので夜の10時になると浜大津にある明日都浜大津のベンチに寝に来ますし、トイレにも寝に来るしそういう方々に声をかけに行こうというのが私たちの今月の活動です。これは餅つき大会に手伝いに来てくれた人にいろんなものをもしよかったら貰って帰ってと言うようにしています。

◇

相談員セミナーといいまして民生委員の事務局、民生委員児童委員協議会の事務局を持っている大津社協は21年前から民生委員さんたちに初級セミナーをまず1年目に受けていただき、この初級セミナーを受けていただいた人たちの中から中級セミナーに進んでいただく。

地区の会長の推薦を受けた方々年間約100人の方々を7か所の出張相談所でふれあい相談所の相談員になってもらっています。私たちの狙いは635人いる地域を担当する民生委員さんの中にはとっってもいい人たちがいらっしゃるのでその民生委員さんに相談員になってもらおう。

相談員になってもらって困った人がいたら社協に繋いでもらおう。そういうことを20年間やってきました。

おかげでこの方々から大津社協への連絡が凄くありがたいです。民生委員を辞めてからでもこのことはお願いしています。民生委員を辞めても役をやってもいいから困っている人が地域にいたら社協に連絡してきてと言っています。後でも言いますが社協はスーパーマンではなくて社協の後ろにスーパーマンたちがいるのでその方達に繋がりますから民生委員は大津の宝です。

民生委員さんたちに頼んでいるのは自分の経験で相談活動をしなくてほしいということです。相談というのは聞いて、聞いて、聞いて。で、正論を言っただけはダメなんです。そんな話を先生にしてもらったり私たちがしたりします。そんな中でたった31名の職員が走り回るだけではなくて地域で相談ののってくれる人たちがいるこれが大津の強みです。

◇

写真は津市内36か所ある学区の社会福祉協議会その会長さんたちの毎月1回の定例会です。定例会ではこういうふうにブロックごとに座ってうちの担当職員もここに入りまして連絡会の後にブロックでのいろんな話し合いをここでします。私たちから言えば大先輩の地域の役員さんたちに今相談活動で困っていることの話などもよくします。

この場面で社協には毎日のご飯を食べていないという相談が来ているので、できたら生活困窮者に物資を提供してほしいという依頼をするわけです。このオッチャン達は目の前で困っている人たちなんて見たことないわけですから、ホンマかいなという話しになるんですが具体的な話をするとよしそうしたら物資を集めたるという話しになって、この写真が届いた物資です。お米はこれの10倍くらい届きますし、後ろに積んだ物資もあって回覧板で回してくれる学区もあります。

市民センターに社協の生活困窮者物資入れというものを置いて置いてもらって市民の人たちがそこに入れてくれるような学区もあるし、ある学区はバザーをしてそのお金でカップヌードルを買ったりして持って来てくれます。

この生活困窮者の物資が私たちの心にどう響いているかという最前線で相談に乗る私たち、私の後輩たちは後ろに物資があるし物資の後ろに地域の人たちがいるという安心感は相当力強いです。物資の力が困窮者に与える安心感と私たち相談員に与える力は何よりも強いと感じているところです。大津の人がちょっとだけ寄付をしてくれるだけで職員がこんなにも強く頑張れるのと生活に困った人がまずは何かを食べてもう一回がんばってみようと思えるのはとても素敵なことだと思います。

同時に、私たちがやっている方法、助けてと言う社協活動をしているんですけど地域の皆さんに助けてもらうこのやり方は大津のやり方なんですけれどもこれが全国に広がるといいなと思っています。

誰かがちょっとだけ助けてくれることで誰かがものすごく元気がもらえるこういうことが素敵なことだなと思います。

大津市内のある学区は有線放送が届く学区がありまして、その学区では割と豊かな人たちが住んでいる学区なので冷蔵庫とかテレビとかの家電製品を現在大津社協が相談に乗る中で冷蔵庫を求めています!!明日の午前10時冷蔵庫回収に参りますので、みなさんまだ使える冷蔵庫がありましたら市民センターまでお越しくださいって一報を入れてくれると冷蔵庫が3台も4台も集まって、こういうわらしべ長者みたいなことをしているんです。

もちろんこのお返しをするんです。お返しはうちの担当職員がこの生活支援物資を困窮者に渡した時に頂く言葉がありますよね。「この物資のおかげで子どもたち3人となんとか乗り切れます」とか、「これで自殺しなくてすみます」とか相談の中で交わされる言葉を記録しておいて役員会で役員さんたちに返したり文書に書いて返しますと、返した文書をまた地域で閲覧板で回してくれたりして進めていくので小さな相談のつぎやきが地域に人に返っていくということはとても大事なことだなと感じています。



相談者同士のミーティング、私は熊沢相談員に連れられて断酒会に行ってから断酒会の虜になりました。

皆さんの中にも医療関係者がいらっしゃれば断酒会というものをご存知かと思います。断酒会に行ったことある人?1人、2人…3人と手が挙がりました。断酒会でやっているのは一週間に1回なんですけれども今週もお酒を飲まなかったという話を自分の酒害体験、お酒で家族をボロボロにした体験を語りながら周りの人の語りを聞きながらあの人ががんばっているならおれも頑張ろうということで一週間お酒を飲まずに過ごすという当事者の取り組みです。

医者に抗酒剤をもらって酒を飲むなと言われても酒を止められなかった人たちが酒を辞めている人たちの壮絶な体験談や今止めているということを知りただけでお酒を止めることができる。そんな人と人との繋がりを使った依存症を防止する方法が日本にあるということを示してくれているのは断酒会なんです。断酒会にならってその後依存症のグループがいくつもできてきて薬物依存症のダルクというものをご存知でしょうか?ダルクは薬物を使って親を痛めつけ家族を痛めつけボロボロになって刑務所に入った人たちがダルクの力で薬物をするのを止めるそういう方々が作っている施設です。



そういう当事者の依存症の会を見ながら大津でやっているのは援助職同士のミーティングです。援助職が2か月に1回集まって自己紹介をします。15人から20人くらい集まるんですけれども、最初この会をしたときに何で大津社協に言わ

れて行かないとあかんだということに来てくれたのは老人ホームの相談員と市役所の相談員とうちの相談員の3人だけ。1年間やっても2年間やっても人が来てくれなかったときにうちの相談員は「山口さんもう止めてもいいですか?」と言ってきたのでそんなこと言わないで「3年やろう」と3年やってあかんかったら止めようと言っていたのが、その後警察の相談員が入り児童相談所が入り県の社協が入り今では28機関が2か月に1回集まっています。

それと精神保健に特化した部会がほしいという声も出てきて、MSWの皆さんやPSWの皆さん、ドクターや相談員も入って精神保健福祉部会というものもしてしまっていてそれも21年間2か月に1回、うちの職員は毎月1回人前で自己紹介をしますのでUのように自己紹介をするのが慣れてきました。自分の弱さを人前で話すのも慣れてきています。断酒会のように弱さをみんなに公開することで自分もまた頑張れる同じように私たち援助職も強さで繋がるのではなくて弱さで繋がる強いつながりになると感じています。

この援助職ミーティングは2時間の会議なんですけれど1時間は自己紹介にしています。自己紹介の時のルールはメモを取らないことです。休憩してからそれぞれの職種の最近の話題などを話してそれはメモを取ってもよいというルールでこちらは25年間やっています。

予算ゼロのこの取り組みは大津社協の取り組みの中でもトップクラスの評価を受けている取り組みです。予算ゼロと言いましたけれど例えば私がこれに2時間入ったら私が1時間単価5千円くらいの職員なので1万円かかっていると考えてももちろんお金はかかっているんですけれども、こういう取り組みがボディブローのように効きます。

相談に来られる方の中には相談をするのが趣味のような人格障がいを持っていらっしゃる方もみえて、社協に来て保健所の悪口を言う。保健所に行って警察の悪口を言う。警察に行って社協の悪口を言うっていうようなかき回す人がいます。その人は別にかき回そうと思ってなくて「私の方を見て見て」っていうんでしょうけれど結果として相談員がかき回されるんです。保健所の相談員はアカンなあとかやっぱ警察はアカンなあとなるんですけれど、私たちは顔なじみなのでこんな人来たけど大丈夫?って言うのとあの人いつも来るって話になります。

大津の相談員たちは仲がいいです。仲がいいというのが何よりもやりやすい。困ったときに相談し合えます。相談員というのは私もそうでしたけれどここにおられる皆さんもどちらかというと孤独なんです。その職場に1人か2人の相談員が相談をしますのでどこかに悪口を言われたりすると途端に凹みますね。非常に繊細な職種なんです。



そこで相談員同士が弱さを言い合ったり話し合ったり励ま

し合ったりできる関係を作るのが社協の仕事なんじゃないかなと強く思うようになりました。私が生活福祉資金の相談をし地域福祉事業の相談をしているときに毎日のように弁護士さんのところへ訪ねに行ったりしていると、私の上司が「山口、そんなに弁護士さんのところへ行くんだったらこの人と思う人と顧問契約を結んだらどうだ」と勧めてくれました。

私は私より1つ2つ年下でこの人と思う人をつかまえてここに写っている弁護士さんですけれども、彼に頼んで顧問になってもらいました。

以来十数年、大津社協の顧問弁護士になっていただいて大津社協の危機を数々救ってくれました。その顧問弁護士料は月1万5千円からスタートしてその時々で危機を救ってくれるたびに当時の局長が「弁護士にいくら払ってるの」という話から「それは安いから2万円にしてあげろ」と2万円に上がり3万円に上がり今3万5千円なんですけれども今年またピンチを救ってもらいましたので月5万円にしようかと思っています。

そしてこの弁護士さんとの定例ケース会議が凄く効きます。月に2回社協に来てもらうんですけど、私たち相談員が聞いてもうまく答えられない案件が多いんです。

例えば自営業をやっている人で1日店開けてお客さんが2人、従業員はいないけれど夫と妻2人でやっている。自営業で食べ物売っているんですけど成り立たないので食堂を閉めようかどうかの相談に来たその人に私たちが閉めたらどうですか？と言ってもその人たちは頑張りたいために相談に来ているわけで閉めようかなんて思ってないんですよ。どうやってお金を貸してもらおうかと思っているので…。

こういうタイプの人の相談に弁護士が乗りますとその人たちはコロッと気持ちが変わります。弁護士が計算してくれて「Aさんよく頑張ったな。でももう無理ですよ。ひと月あけて赤字が10万1年で150万も160万も赤字を作ったこの後どうするの？ここで白旗挙げて一緒に整理をしましょう。手伝いますから」と弁護士が言ってくると代々、店を守ってきた人たちもほろりと涙を流して「本当はもうアカンなと思ってました。社協でお金を借りれなかったら死のうと思ってましたけれども弁護士の一言で頑張ろうと思いました」と。このように自己破産をした後でもスタートできるわけです。

社協の相談ってそんなもので社協の職員が何度言っても市民は社協に何をしに来るかという金貸してほしいから来るんです。5万10万のお金を貸してくれ、市役所では貸してくれなかったから社協に行ったら貸してくれるんちがうかと言って相談に来る人たちの相談を断ってからが私たちの仕事なんです。それは貸し付けの対象になりません。そう断ってからが社協の仕事です。そう思って15年、後輩たちも今それを言っています。

私はこれを言ったときにとっても辛かったけれど貸し付けの相談を断ってから後ろに弁護士がいる。今は顧問の司法書士もいますので専門職とタッグを組むことで社協の相談の値打ちがあがります。弁護士が大津社協の相談は「面白いな」と言ってくれます。「何ですか？」という、こんな人たちは弁護士のところに来ないと。弁護士さんのところにはある程度相談が整理されてくるとかお金がかかるので貧しい人の相談が来ないとか、そんなことを思うと大津社協の相談は弁護士冥利に尽きるらしいです。

あともう一つ言ってくれるのは市役所でやっている弁護士相談は匿名性の高い相談で30分で切りあげで名刺は渡せない。なぜかと言うと相談に来ている彼の背景が分からないし彼がどんな人でどんなサポートを受けるかわからない中で弁護士は30分で出会った人のことを引き受けることはできない。弁護士としての法律なコメントはできても受任することはできない。

そういう弁護士が社協の相談は後ろに私たちや民生委員や専門職がケース会議のように相談をしますので、法律上のアドバイスをしてその後安心感があるので社協の相談は面白いなど言ってくれます。以来この弁護士が推奨してくれて司法修習生が大津社協に実習に来ます。ここ10年司法修習生が毎年5人10人と社協のことや民生委員のことを知らずに弁護士はできないと彼が言ってくれて私たちはそんなものかなと思って弁護士さんたちの修習に付き合います。謝礼はゼロ。去年くらいから5千円くらいくれるようになったのかな？

その司法修習生たちが大津で開業して弁護士になって弁護士になった彼らから相談があるというのもよくあることで、国選弁護士でホームレスの人を引き受けたいけれども彼の生活をどう支えて行ったらいいかわからないので一緒に警察署に来てほしいという相談を弁護士から受けることもあって嬉しい限りです。



写真は寺子屋プロジェクトの打ち合わせ。後程また出ますが生活困窮者自立支援法のモデル事業を受けた私たちは、これは国のやる法律で自治体の実施の法律だけれども地域福祉的に進めようと思っていて子ども貧困問題に地域の人たちを巻き込んでいます。

これが寺子屋プロジェクト、後で資料がありますので見せますがこれはふわりサロン、サロンに元ホームレスの人たちが来て大津社協の電車と福祉、緑日電車のイベントでたこせんコーナを担当してくれることになってこのときはたこせんソースを塗ってどのソースが美味しいかというのを食べてみているんですが元ホームレスの人たちが集まって彼らが発見したのは自分たちが誰かの役に立つそのことがすごくうれしいと言ってくれて「そうか!!」と私は気付きました。



大津社協に、あるいは大津のNPOで生活保護に救われた彼らは次に何かやることを求めているんだけど、心が傷ついたり体が傷ついたりしてすぐには働けない彼らの居場所を作るということでこうしたたまり場を作っているんですが、彼らはたまり場で話し合うだけでは話が持たなくて彼らがやっているのはボランティア活動なんです。取り組みの時に何かを手伝うことですごく嬉しかったそうです。綿菓子や的当てもやってくれています。

誰が元ホームレスで誰がうちの職員か分からないと思えますけれどもみんなそうなんです。こういう取り組みを通して「自分たちも何かをやりたいわ」と言ってくれます。

ふわりサロンという名前を彼らが付けたのは私は凄いなと思っています。ふわりはふんわりと集まれるという意味でふわりサロンと名付けたんですけども、わたしはそのふわりサロンの「ふ」というのは福祉の事を意味しているのではないかと。そして、分かるためには利用者に学べというふうにあとでネーミングを付けてまして凄いな名前を付けたなあとで思いました。福祉のことは利用者に学ぶのが一番いいです。研修会で学んでわかることは一つか二つ、利用者にとことん学んだ方が良いに違いないとはっきり思っています。



これはある日のケース会議。生活保護と病院の医療ソーシャルワーカーそれと民生委員さんが話し合っていて今、大津の日赤に入院している彼女が家の掃除をしなければならない掃除をするのは誰だろうということで話し合っていました。

私たちは手を挙げて大津社協は昔から「お掃除プロジェクト」というのをしています、ゴミの家を見ると職員の血が燃えるんです。ゴミを見ると血が燃えるのは何かというとゴミはきれいになりますからきれいになったら「ありがとう」の言葉が待っていますので、ゴミを見ると片付ける。

この日のゴミは強烈でした。ある料理屋を営んでいたご夫婦の家。夫が亡くなって妻が入院をしてさあ退院というときに家がグチャグチャという民生委員さんとヘルパーとケアマネの訴えでした。料理屋のカウンターで彼女はご飯を食べるんですけど、本当にグチャグチャで電気の請求書も介護保険の請求書も全部ここにあります。

こんなふうになっているということはゴキブリがたくさんいまして1000匹を超えるゴキブリを見ました。人生で出会うゴキブリに全部出会いましたので、ゴミで血が燃えると言いましたが実は引いてました(笑)。

このときに私がしたことは、彼女には年金がありましたので5万円出してもらって処理費用と業者にも来てもらいました。業者にも来てもらって5万円ではとても引き受けられる案件ではないんですが、尚且つ私が頼んだのはちょうど別件で相談に乗っていた生活困窮の人がいらっしやっただけを彼

バイトで雇ってくれと。1万円でも雇ってもらえると彼は助かるからという業者も社協の言うことは何でも聞くわと彼も雇ってくれて掃除をしました。これは座敷のところこんなふうな服がいっぱい。

彼は頑張っていました。誰よりも働くのは困窮者の彼でした。1万円のバイト料が待っていますから。業者のスタッフもうちの職員も頑張りました。頑張りましたけれどゴキブリの数が多くて引きました。私たちがやっていたのはスプレーをかけまくることで。それでも頑張ってくれいになって業者の人が思いっきり頑張ってくれまして、カウンターでは食べられないようにして冷蔵庫も何もかも全部捨てましたので、新しい冷蔵庫も業者がプレゼントしてくれて彼女は「何か自分の家じゃないみたいだな」とか言っていました、退院してしばらくここで生活することができました。

その後グループホームに入りました。ヘルパーさんや民生委員さんも一緒に手伝ってくれて喜んでいました。「誰もやらないことは社協がやる」、これを信条にしているんですけどそれはとっても危険な言葉で時の局長はいつも私たちに「どこまでやるんだ」と言いました。

局長というのはだいたい市のOBが来るんですけど「どこまでやるんだ」という言葉は「そこまでのな」ということです。私たちは「どこまででもやります」という言葉をグッと我慢して、熊沢相談員が言ってくれる「そういうことをやるのが社協ですなあ」「ええ職員雇いましたな」と熊沢相談員は局長に言ってくれますので局長もそう言われると「ホンマやな」みたいになるんです(笑)。

申し訳ないけれどもどこまででもやってきました。どこまででもやってきたから局長も最後には大津社協のファンになって行政に行き、社協ってこんなことやってるんだよと局長が社協の応援団になって行政からお金を取ってくる。大事なのは人の動きです。「できない」と断ったらそれはそれなんですけれども、「生活福祉資金の対象になりません」と言っただけで仕事のスタート。そのことを職員一丸となってやっているのがこういう取り組みに繋がっています。



彼は精神障がいを持っていました。彼のところに民生委員さんと一緒に行ったときに、彼のお母さんは認知症で彼のことをずっと支えてきたお母さんの相談と押し入れの中にあるという2000万円のお金をどうするかという相談でした。押し入れ開けたら2000万円が現金であるんです。それを私とうちの職員と民生委員さんとでどうするか相談をして、社会福祉協議会に預けると言ってくれて社会福祉協議会ではそれを彼の通帳に入れて預かりをして彼の金銭管理サポートが始まりました。

お母さんはグループホームに入って何とか今も元気でいます。夫が亡くなり年金暮らしになったこのお母さんはやっぱ

り精神に障がいのある彼の為にお金を貯める。そのことの為に一生を生きたとします。今では何が何やらわからないですがその中で彼はお母さんに全部世話をしてもらっていたので、お母さんが認知症になってグループホームに入って2か月目に部屋で裸のまま凍死して亡くなりました。

もし私たちがもっと彼に寄り添って支援することができていたら今も生きていたのにと残念でなりません。

こういうふうに親子が一つになって本来子どもが力を発揮しなければならない、この力を発揮することができないような親子関係の中で暮らしているそんな世帯がきつといっぱいあってそういう声にならない声がお母さんの認知症、それからお金が上手く使えなくなっているみたいという民生委員の気付きで私たちが部屋に行くまでにもっと気付ける方法がないものかと思っています。

大津社協に相談があがるのは年間でせいぜい3000件か4000件、これは大津市内の相談の10分の1くらいだろうと思っています。もっと少ないかもしれません。3%か4%くらいかもしれません。圧倒的多数は相談に来ていないと思っています。どうしたらいいんだろうというのが彼の支援を通して感じたことです。一人暮らしの方がお亡くなりになるというのをずっと支えてきました。

◇

これは大津市内の雄琴温泉で働いてきた人が亡くなった時のお葬式の写真です。雄琴温泉で働いてきた彼は知的障がいがあって、それでもずっと働いてきました。彼のために雄琴温泉の組合に連絡をしたところ一緒に働いていた人がお焼香に来てくれました。「大津で雄琴で頑張った人が亡くなったんやからみんなで行こう」といって来てくれてお焼香してくれました。彼のためにいっぱい花を飾ってお葬式をしたわけです。1年間に10回くらい今まで100回くらいお葬式をしてきました。どこの葬儀屋が安いかがよくないか(笑)、だんだんわかってきました。

私はお葬式をすればするほどお葬式っていろいろあるなと思ったのもう一つは遺言を書かずに亡くなる人が圧倒的で、権利擁護の人は遺言を書かなくてもいい人がほとんどですけど一方で生活相談のところでなくなる人で遺言を書いていない人が少ないので私は大津市内でエンディングノートを作る活動をずっとしています。自分の死と向き合う機会がありません私たちがなのでお葬式の話も地域ではよくさせてもらっています。

◇

この写真は相談員セミナーを受けた民生委員が連絡をしてきてくれて「山口さん本当にいいの？ゴミの家だけ」ということで連絡をしてきて行ってみました。

玄関はこんな感じでした。玄関には猫のキャットフードの

空き袋があつたりして猫好きの方なんだと思います。トイレに行くとトイレもこんな感じでした。その日は私と後輩職員の井ノ口はとりあえず見るだけで帰ろうと言っていたんですけど、これは見るだけでは帰れないと玄関とトイレだけは掃除しました。

そうすると井ノ口が後ろで「山口さんそこまでするんですか？」って言うてましたが、私はゴミを見ると血が燃えます。特にトイレのゴミとかを見るとこれを綺麗にしたらもしかしたら彼女はお掃除プロジェクトに乗ってくれるんじゃないか？部屋も写しました。居間は約1メートルほどのゴミでここに住んでいる女性は61歳会社で働いて会社ではちゃんと働いているんです。車も乗っています。会社では給料もちゃんともらっています。

アルコール依存になった彼女は、家の中で猫を飼って2匹3匹4匹と増える中で猫に部屋を占領されている状態でした。猫に部屋が占領される家はいくつもあって最高49匹というのがあったんですけど、ここは4匹だけでした。その後いろんな調整の結果、民生委員さんをお願いして地域の社協の会長さん、民生委員の会長さんなどに集まってきてもらいました。私は「県社協の職員も呼んで」と言って県社協の職員も一人呼びました。

ここでポイントなのは県社協へ電話をして「お掃除プロジェクトがありますけど来ませんか」と言って来なかったら県社協は「愛想無いな」というんですけど、必ず県社協は来てくれます。私が指揮を執るのではなく後輩の井ノ口が指揮を執ってお掃除プロジェクトが始まります。彼女は働いてお金があったのでやっぱり5万円出してもらってちょっとしたものを用意してもらおうのとパッカー車を出してもらいました。

前線で我々がゴミを集めて、ゴミを外に出すと地域の民生委員の会長や社協の会長がこれをやります。みんなでやるのがいいんです。社協の職員だけでこのプロジェクトをすると心が折れそうになるんです。会長さんたちがいると「山口さんたちよく頑張るな」と言って下さるのでそこががんばれるところです。そうするとご近所の人も入ってくれるようになりました。

私たちが大事にしているのは本人に寄り添う担当職員を付けること。ベテラン職員を横にいさせて「大変だったな」とか「相談するまでどうしてたの？」とか「きれいになってきたね」とか一番辛いのは彼女なので、何が辛いかというところと恥ずかしい自分が貯めたゴミの罪深さは一番彼女が知っています。何もできない惨めさも知ってお掃除プロジェクトの2時間の間は、うちの職員が彼女に寄り添って「おまえはゴミ集めなくてもいいからBさんに寄り添ってあげ」と。それが今日の仕事というふうになっています。

この写真だんだん居間が綺麗になっていきます。少し床が見えてきました。うちの職員たち県社協の職員もテンションが上がってきましてピースサインをするようにもなりました(笑)。床が綺麗になりました。うちの職員は「食器も全部捨てて」と言われるのに「今晚食べる食器がないと困るでしょ」などと言いながら食器洗いを始めました。彼女は床を見て「わーきれい。何年振りだろう」と言うようになりました。パッカー車に来てもらってパッカー車に2往復では足りなくて3往復してもらいました。全部捨てました。

この写真を見てもらうと3人は企業ボランティアと書いてありますけれど、彼らは日頃ゴミ収集をしている業者の職員で社長に言ってこの日3人4人派遣してもらいました。彼らが言うには今までゴミの回収の仕事をしてきたけれどもこんなゴミを見たのは初めてだと、大津市内にこんなゴミの家があるんなら私らに言ってくれ、私らもこういうボランティアならやってみたいということで企業ボランティアをゲットしたところです。その他にもご近所の方が来てくれて本人も入れて写真を撮る。これが大津社協お掃除プロジェクトの最終章です。

こういうふうにしておくと近所の人同士が「ゴミ掃除手伝ってくれてありがとう」とゴミ掃除に参加しなかったご近所の人にも近所の人に声をかけるようになったり、Bさんも街を歩いていると「もうゴミ貯めたらアカンで」と言ってもらえる。こういう関係ができることがとても素敵だなと感じています。

◇

「あなたの傍に私がいいます」という熊沢相談員の心は私たちに浸透していますし、私は彼の言葉をこの後大津社協の職員たちに浸透させていこうと考えています。

熊やんとの愛ことばというものがあって、この3つプラス1つなんですけれども「聴く」が「効く」「困ったときは「まあええか」「みんな一緒にボチボチいこか」このことを後でみんなと一緒にもう一度かみしめさせていただきます。



今日スタッフの中でどなたか、京阪京津線で大津社協のふれあい号を見たよと言ってくれました。京阪電車とタイアップして毎年半年間、社協の電車が浜大津～坂本、石山を走るん

です。そこに熊やんの言葉をデザインをして走らせました。

“困ったときは「まあええか」とかです。これはセンターに来る子どもたちの顔です。こういうことをして遊んでいるところです。

◇

では、最後ラスト10分になりましたので資料をひとつ。“相談から生まれた24の「プロジェクト」というのはこんなふうになっている私たちもみんなに見せていかないとダメなんです。相談活動というのは外になかなか見えないので“相談から生まれた24の「プロジェクト」”こういうものをつくってPRしてきました。

私たちは何で相談をしてきたかという社会福祉協議会という組織は分かりにくい組織なので、いつも分からない人たちから「社協って何をしているところか分からない」という言葉が出てきます。何をしているか分からない、特に相談活動は何をしているか分からないのでこれをぜひしっかりしたい。ここを見せたい。心底社協の応援団を作るには相談じゃないだろうか？ということでこのことを柱に据えました。

もちろんいろんなことをしているんですけど、社協に行ったら助かったという人、どこかで大津社協で助かったと言ってくれたら力強い言葉になります。このことをまちづくりの土台にして社協の土台にしました。

ここでどんなプロジェクトをしてきたかという、例えば“地域福祉連絡表プロジェクト”小学区単位に行政の担当者の名前を一覧表にする。そんな表を作って各団体や民生委員さんに配り歩きました。これは印刷代だけでできるプロジェクトで喜ばれました。最初は行政の職員から「何で私たちの名前を勝手に一覧表にして出すの？」と苦情が来ました。けれども2年目からは「早く一覧表頂戴！」と(笑)。市役所はそれぞれ縦割りで仕事をしていますので縦割りを横に繋ぐ課がないので私たちはそれをしていきます。“相談機関連絡会プロジェクト”は先ほど言ったところです。

そして、⑤番目“法人後見NPO設立プロジェクト”成年後見制度というものができて社会福祉協議会によってはこれをやる社協もあるんですが大津社協はこれをやるのを止めようと。むしろこれをやる専門職集団のNPOを作ろうということで関係者と団結をして法人後見NPOを設立して私はここで理事をしましてこれを支えています。

他にも“権利擁護ハンドブックプロジェクト”“顧問弁護士プロジェクト”“遺言プロジェクト”“悪質商法撃退プロジェクト”などがあります。

“悪質商法撃退プロジェクト”でいつも地域でやっているのは弁護士さんの一言をみんなで共有しているんですけど「向こうから来るものは危ない」を合言葉にしています。

じゃあ皆さんも一緒に言ってみましょう。

(会場)「向こうから来るものは危ない」。

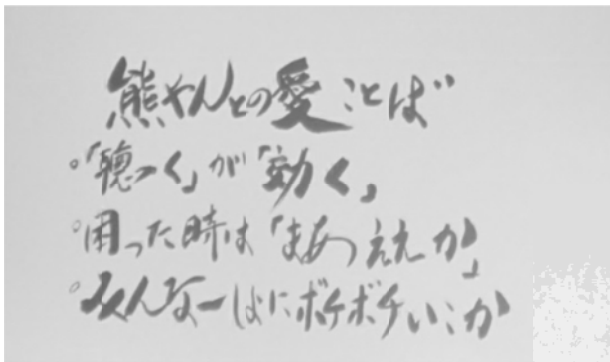
地域の講座では必ずこれをやります。買い物は自分で行って自分でする。もしくはこれを買うと決める。

“傾聴ボランティアプロジェクト”相談の中でヘルパーさんが帰った後が一番寂しいという声を聞いて介護保険が始まってからですが、それだったらということで傾聴ボランティアというボランティアを募集して講座をしたところ大津社協が一番人気のボランティアとなりました。毎回30名定員で決まっているところ100名くらい応募があってこんなにも人の話を聞きたいというもの好きな人がおるんやなと私たちも講師をしながらびっくりしています。

あとは“依存症支援プロジェクト”私はどちらかということ共依存で困った人が好きだからゴミを見ると血が燃えるというのはたぶん病気だと思うんです。Uもそんな病気にかかっていると思います。困っている人が好きというのはちょっと病気で本当はもう少し距離を取らないとダメなんですけれど依存症の人たちがグループを作っているその依存症の人たちが作っているグループを支援するというのを私は信条にしています、アディクションフォーラムというフォーラムの事務局長みたいなことを6年7年とやってきました。

“生活支援物資プロジェクト”“越冬支援プロジェクト”“学区社協貸付プロジェクト”大津にある36の小学校区の今24小学校区で1万円から3万円のお金を貸してくれるんです。困っている人にすぐにお金を貸し付ける制度では起案とかを出すすと1週間くらいかかるので、でも明日電気が止まるそういう人たちの為に学区社協で1万円か2万円を貸してます。そうすると利用者は喜ぶます。そのお金は帰ってこないことの方が多いので学区社協は困るんですがそのお金はバザーとかで集めてもらっています。

あとは⑩番目“寺子屋プロジェクト”⑪番目“当事者サロンプロジェクト”“相談員の学びの場づくりプロジェクト”“子ども居場所づくりプロジェクト”“三井寺プロジェクト”“熊やんプロジェクト”などがあります。



“熊やんプロジェクト”のところで私の大先輩熊沢相談員から学んだ「熊やんと愛ことば」皆さんと一緒に共有して終わります。

①“「聴く」が「効く」”というのは正論ほど役に立たないものはない。お酒を飲んでいる人に酒止めなさいって言ったってその人は酒止められないから飲んでるんです。タバコ吸っている人にタバコ止めなって言っても止めると言われれば言われるほど最後の最後まで吸うという話もありますよね？

「聴くんです」、聴いて、聴いて、聴いて相談員たる者正論ほど役に立たないものはないと知っておかなアカン。民生委員さんや社協の職員たちがまず熊沢相談員から学ぶのはこのことです。では皆さんいきます。

(会場)“「聴く」が「効く」”

これが大事！聴いて、聴いて熊やんはこれが大事だと言いました。なぜかと言うと正論を言うとなんかのわかってるからとって相談者が来てくれない。でも治らないわけです。

②番目“「困ったときはまあええか」”という姿勢。自分を許すかわりに、相手も許す勇氣。相談員はスーパーマンではないのでうまく行かないこともあるそんなときに困ったときはまあええかという言葉を知っておかなくてはアカン。では皆さん「まあええか」を5回言いますよ。

(会場)「まあええか」「まあええか」「まあええか」「まあええか」「まあええか」。

小学生や中学生にこれと言うのは良くないですけど(笑)、私たち大人で頑張っている人は「まあええか」という言葉を魔法の言葉として胸に置いておかなければなりません。3年前に相談に乗っていたうつ病の人がいて彼女は父親によるうつ病のことをわかってもらえたと行って随分褒めたんです。よかったな、粘りのおかげやなそう褒めたところ彼女はその日の夜に山で首を吊って死んだんです。もし私がいつものように聴いているだけにしておけば彼女は死ななかつたんじゃないのかと今でも思っています。彼女がなぜ死のうと思ったのか今となっては分かりませんが、まあええかという言葉がなかったら私はもっともっと自分を追い込んでいたような気がします。

③番目“「みんな一緒にぼちぼちいこか」”これはねみんな一緒にぼちぼちとやろうかというのと、もう一つはどこからでもいつからでもスタートできるということだと私は感じています。大阪の吉本新喜劇でボコボコに殴られた池乃めだかがぼちぼちやったろかと言いますよね。あんな感じ。みんな一緒にぼちぼちいこかというのはこれからやってやるでという言葉に聞こえます。ではこの言葉も一緒に

(会場)「みんな一緒にぼちぼちいこか」。

ぼちぼちいこかに強い力を感じています。最後に弱さの情報公開が絆を作る自分の弱さを公開する勇氣というのが私たちはなかなかないし、人前で自分の話をするというのはなかなかできないことなんですけれどもそういうことが誰かが誰かを応援するということになるのではないかと感じています。

このパワーポイントの字が入った資料は今回あまり使いませんでした。本当は研修会だとこれを使うんですけどこれをやると眠くなってるのでダメなのと何か凄いことをやっているように聞こえちゃうのでこれは資料として見ておいて下さい。もしこの中で質問や言いたいことがあれば1日あるので言って下さい。

では、私の話はこれで終了です。私の話が終わった後、Uが一言皆さんに弱さの情報公開をしますので聞いてあげてください。では前半私の話は終了です。ご清聴ありがとうございます。(拍手)

#### <大津市社協職員Uさん>

あらためてUと申します。よろしくお願いします。

ここに向かう電車の中で山口課長から今日は話をしてもらうからよろしくと言われて参りました。



弱さの情報公開ということで私は小さい時から両親からずっと虐待を受けていて、頭にたくさんキズがあるんですけど父親はDVで家庭内暴力が凄くて母親に当たっていて母親は父親から受けた暴力をたぶん私の方に向けてずっと虐待を受けていました。

小学生になる頃に結局両親は離婚して母親の方に私は引き取られたんですけど、母親もどこかに行っちゃってそれからずっと祖父母のもとでお世話になっていました。

小学生や中学生の時は授業参観があって家のお祖母ちゃんが毎回出席してくれるんですけどそれが嫌で嫌で仕方なくて何で僕の家はお母さんが来てくれないのかとずっと思っていました。

中学生になるとそういう他の人と違う生活ということに対して、すごく敏感になっていて部活をした後、終えて家に帰るのが本当にしんどかったです。家に帰ると祖父母と毎日ケンカしてちょっとグレっていました。

高校に入ってちょっとずつ将来のことを考えるにあたって、誰かに必要とされたいという気持ちが人一倍強くなりました。今思うと両親に虐待されていて離されて自分は誰にも必要と

されない人間なんだろうなと思っていて感じています。大学は福祉系の大学に入っているうちに、先ほどの熊やんの愛ことばにもあったんですけど、困った時は「まあええか」この「まあええか」という言葉で私はだんだん両親のこともそれを恨んでいた自分の事も少しずつ許せるようになってきました。今は逆にそういう家庭に生まれたそういう経験をしてきてよかったなって凄く思っています。

まだまだ微力で山口課長からもあったように利用者さんの方からたくさんいろんなことを教えてもらっています。もちろん本人さんにとここまで寄り添えるか分からないですけども、その方と必死に向き合っているかその利用者の方に認められるように頑張っていきたいなと思っています。またこの仕事を続けていく上で、仕事自体は楽しいんですけども自分の痛みとかがこの仕事を進めていく原動力になっているのかなと感じている次第です。

まとまりがないですけどこれで勘弁して下さい。

#### <山口>

喋るのがすごく大変だったかもしれないですけど、精いっぱいUが喋りました。

こんなふうに当事者が弱さの公開をする。そのことで誰かが応援する。それが人の心に伝わる。きっとこういうことを熊やんは言いたかったんじゃないのかな？と思っています。人前で話をする事で強くなっていくこと、皆さんにも実はあるんじゃないでしょうか？当事者組織ではそういう会話を毎回やる。そして自分も吹っ切れて良いんだなということを感じます。

そういう当事者組織をこれからも応援したいと思うのとUが話したようなことを思っている子どもたちが今いっぱいいるので、どういうふうにしたらいいか。

皆さんと一緒に今日は午前午後、声にならない声をどう聴くのか一緒に考える場とさせていただきたいと思っています。この後は私への質問というよりもできたら感想を周りの人と話す時間を取れたらなと思っていますのでよろしくお祈りします。

ではUにもう一度拍手を。(拍手)大津社協をこれから担う彼ですので今日は連れてきてよかったなと思います。

#### <司会>

山口さん、Uさんありがとうございました。そうしましたら、ご質問だとか感想などいかがでしょうか。

### ＜感想・質問-1＞

山口さんのお話もとてもよく、そして最後の彼の話がとても胸にきました。

弱さをみんなの前で話して共有できることは、人として素晴らしいことだと感じました。日本も家庭が崩壊しつつあるところがたくさんあってそういうことは何も特別なことじゃない、自分の親だけが特別ではないということを思い出しました。

### ＜司会＞

その他にございませんか？

### ＜感想・質問-2＞

津市で民生委員をしています。山口さんのお話は生きるということの大きな土台、基礎のお話を聞いたようでとてもよかったのと、Uさんの話が最高でした。

これまで貧困や死に瀕する人や自殺防止のテーマばかりの詩を書いています。いつも心掛けているのは自分の事を話をしながら、私も過去に虐待を受けたことがあるのでそういうことと社会の問題とを結んで書くようになると本当に心が楽になってきました。弱さの情報公開というところが自分の物語を語るというところとすごく共通し、今の私の生き方＝詩を書くことすべてが自分を語る自分をさらけ出すということとそれを社会の問題とどう切り結ぶかそこだと思います。

### ＜司会＞

他の方がいかがですか？

### ＜感想・質問-3＞

介護業務を担うNPO法人に属しております。

親に虐待されたというお話を聞かせてもらって、私も2年ほど前にそういう方と知り合いになっていろいろ関わっております。本当にびっくりする生活をされている方がいるなどと思います。

そしてお話の中にありました、精神障がいの子息さんを持ってたくさんのお金も持っていたけれど、その息さんが亡くなったというお話を聞いて身につまされています。私が援助している人なのですが、その方も精神障がいの息さんがいらっちゃって自分は80歳代なんだけれどとても困っているという方がいます。その方の援助をしていますなかなか進まないものですから、こういう場でいろいろ話を聞かせていただいて若い方が頑張っているのが頼もしいと思いました。

### ＜感想・質問-4＞

私は今65才ですけど36歳の時に地域の夜間高校へ行きました。私は義足なのでツッパリのお兄ちゃんたちが、おばさんが入ってきたということをビックリしながらも私の足を

抱えて教室を移動させてくれたりしました。

彼らたちが若いので柔軟に私を受け入れてくれたと思います。その後、私は障がい者でサポートセンターの職員をしています。前半少し遅れましたので「熊やん」という方がどんな方だったのかちょっと教えていただきたいなと思っています。

### ＜山口＞

良い質問をしていただきました。熊やんは熊沢孝久さん。熊沢蕃山という江戸の後期の賢人の末裔なんです。

小学生の時に戦争で父親達が亡くなり、下に兄弟が2人いて本当は学校の先生になりたかったんですができなくて、村役場の職員になりその後滋賀県庁の職員になりました。

ストレスがたまってアルコール依存症になり薬物中毒になり、薬物依存とアルコール依存を抱えながら県庁を勤め上げ民生委員をし、その後自分の家で「熊沢こころの相談所」と婦人保護施設の施設長もされてきました。

相談をすることで依存症から救われたと彼は言っていました。それと断酒会に行くことでお酒が止まったと言っていました。

地獄をみてきた熊沢相談員は相談に乗ることでなんとか自分を律するというを信条にしながら大津社協に来てくださった平成9年から今年の4月に癌で亡くなるその日まで、病院で相談に乗っていました。熊沢さんのことを我々は引き継いでいきたいと思うし、この言葉は日本の地域福祉のまた相談活動をしている人の薬のような言葉になればいいと感じているような場面で熊やんの話をしてします。

熊やんは生前葬をされまして、生きているうちにみんなにお礼が言いたいということで300人に集まってもらいました。熊やんにありがとうを言いたい人がみんなやっ来て来てという生前葬をさせてもらって、とっても幸せに亡くなられました。今は献体に入っていちゃるので滋賀医大で秋くらいにはもうそろそろ解剖をされるという話を聞いています。この熊やんの言葉を皆さんのものにしてもらえればうれしいです。ありがとうございました。

では、残されたあと10分でせつかなので本当は皆さんの感想が聞ければいいと思うんですがそうもいかないので、隣の人同士くらいでちょっと今日の私の話は前座みたいなものでUの話がグッと来たと思います。

今日のテーマは「声なき声へのアプローチ」です。彼もこの話するのに半年かかったし、私たちの前でもしなかった話を今日はしました。彼の言葉も聞きつつ私も話も聞きつつ、ちょっと感想をお隣の人と言ひ合うそんな時間を10分ほどとらせてもらいます。その後発表とかはしないので気楽に話してください。ではよろしくお願ひします。

### <長友>

では、そろそろお昼になります。まだまだ話したりない方もおられると思いますが、それぞれ問題意識を持って山口さん、Uさんのお話を聞いていただけたかなと思います。

### <山口>

最後に皆さん、私とUの話を聞いていただいてありがとうございました。

最後に「助けて」の練習をして終わりたいと思います。まずはつぶやくような声で(会場)「助けて」。では、会話くらいの声で(会場)「助けて」。では最後に大きな声で窓も閉まっています。大丈夫です。(会場)「助けて」。ありがとうございました。

多くの人はこの「助けて」が言えない中で声が届かないということも含めて気恥ずかしさを体験していただきました。

声にならない声をどんなふうを受け止めていくのか、午後からは身近な実践を聞きながらまた学びを深めていきたいと思っています。

どうもご清聴ありがとうございました。

### <司会>

山口さんありがとうございました。皆さんもありがとうございました。午後は1時から開始となります。

\*\*\*\*\* 午後の部-1 \*\*\*\*\*

### <司会>

では、午後の部を始めたいと思います。

午後は4名のシンポジストの方からご報告をいただきたいと思っています。

1番目が田中伸二さん、津市社会福祉協議会地域福祉課長です。2番目が青木幸枝さん、エスペランサの代表で元小学校の教諭。3番目が松岡典子さん、MCサポートセンターみくみえの代表。最後に村田順一さん、三重ローカルアクトよりそいホットラインの方からご報告いただきます。

では早速ですが田中伸二さん、ご報告をお願いいたします。

### <田中>

津市の社会福祉協議会の田中です。

午前の大津市社協さんのお話を聞いておまして私から言うようなことは何もないなと思ったくらいですが、津市の社協はいったいどのような動きをしているのかということをご説明させていただきます。

津市も合併してちょうど9年目を迎えております。10の市町村が合併しましてようやく社協の組織も落ち着いてきたかなという状況です。津市にお住まいの方は津市の社協はいったい何をしておるのかなと今のお話にもあったように津市社協はこんなことをやっていますよということをお伝えさせていたいただきたいと思います。



私は以前、社協で働くことになる前は人との交流をやりたいたいということで養護学校や企業などで働いていました。その後、知的障がい者の施設の方に8年ほどいました。障がい者福祉に関して、滋賀県は先進地です。私も糸賀一雄さんというノーマライゼーションの基本的なところを継承された近江学園という施設へ、民生委員さんと一緒に訪問したことがあります。

さて、津市の地域福祉を取り巻く現状ですが、平成25年の3月31日現在で人口としては28万5千ほどの人口となります。高齢化率は25.6%。10の地域がございまして久居地域、津地域が24.8%。特に美杉地域になりますと52.1%の高齢化率です。地域によってかなり特性が違い、地域ごとの福祉事業を展開する必要があります。

一人暮らしの高齢者は16,916人です。これは住民基本台帳上のことで、実質の一人暮らしというのが9千人から1万人弱と予想されます。介護保険施行前と比べますと、1.2倍になっているというデータです。それと要介護認定者数が1万人を超えています。認定率としては20%くらいで、そして障害者の手帳(3種類)をお持ちの方が1万1千人ほどおられます。特に精神保健福祉手帳を保持される方が増える傾向にあり、5年前と比べますと1.4倍ほどです。

先ほど大津市さんのお話にもありました民生委員さんの数は津市では約600名です。その内主任が44人という形になっております。自治会数が1006あります。1006という私も旧の時は56自治会くらいしかなかったので1000を超えると何ともという思いもあります。それとボランティア団体数が332、これはあくまで社協のほうで登録していただいて把握している数です。そしてボランティア登録人数が1万1千人ほどです。

こうやって津市をみていきますと、認知症、高齢者そして一人暮らしの世帯、あとよく言われる老老介護世帯。

そして「認認介護世帯」。これは認知症の方が認知症の方を介護しているような世帯。「障障介護」のような障がい者の方が障がい者の方を介護している世帯もあります。これが一番大変ですね。こうした世帯がたくさんあります。生活福祉資金の貸し付けの業務や認定調査に行かせてもらおうと、あらためて実感します。

こうした中で社協がいま何をすべきか。

支え合いの社会づくりを推進することにあると思います。平成 27 年度には生活困窮者の自立支援法というものが施行され、介護保険法の一部改正、生活保護法の改正等もあります。

それに伴って介護予防の方々を支援するシステムなどを今後考える必要があります。昨年の 2 月 1 日から 3 月 8 日にかけて 20 歳以上の地域住民の方に対して地区社協を通して調査を 2275 部配布し実施しました。その時のアンケート結果の中の一つには「津市社会福祉協議会を知っていますか？」という質問に「知っている」とお答えいただいた方が 8 割いました。ですがこれは地区社協の方を通じてやっておりますので知ってもらっている人に調査をしたところもあるかなと思っ

ています。私もよく社協って何をしているの？と言われる。社協を知らない人にも見える社協というか、今は共同募金とか事務的なことをやっているのかな？あるいは介護保険とかで名前を聞くなという程度ですが、これからは支え合いのところにこちらからもっと入っていかなければならないと思います。

そしてアンケートでもう一つ「地域づきあいについて教えて下さい」と伺ったところ、「親しく付き合っている」が 27.7%、「挨拶を交わす程度」が 20.9%というアンケート結果が出ております。「安心して地域で暮らすために大切だと思うことは何ですか？」という質問については、「近所の助け合い」81.1%、「家族のつながり」64.9%です。特に家族や近所のつながりが大事だということが分かってくる。しかし現状をみてみますと核家族化や、支え合う子どもは違うところに住んでいる。

私もそうなのですが、父親は一人暮らしをしております。週に 1 回くらい見に行きながら生活をしていて、父親が出られないような行事に行きますと 80 歳前後の人がほとんどで、私たち 50 歳前後のものたちは本当に何人かしか残っていないという地域です。畑で作物を作ってもサルがみんな食べていってしまう地域です。こんなところで火災や災害が起きた時にはどうするんだろうと心配しています。

資料として第 2 次の社会福祉活動計画をお配りさせていただきました。津市社協の基本目標が「ささえあいともに生きる地域づくり」これをこれからも展開していきたいと思っ

ています。基本方針としては「ふれあいあふれる地域づくり」「地域の活力を育むひとづくり」「連携と協働による地域のつながりづくり」「いつまでも安心して暮らせるしくみづくり」「安心・安全に暮らせる地域づくり」です。

民生委員さんからもきれいな標語みたいでいったい何をしたいのか？と言われることもありますが、一つ一つを分析しながら今年度第 2 次の地域福祉活動計画が 5 年間の計画ですので、重点的な事業ということで「ふれあい・いきいきサロン事業」。これは地域ごとで戸端会議場づくりの見本として、いろんな地域にいきいきサロンを展開していきたいと思っ

ています。例えばコミュニティカフェであったりお喋り会であったりあるいはラジオ体操をしているようなサロンもあります。こういったサロンをいろんなところで展開して、社協も関わっていききたいと思っております。もう一点は「地域福祉教育推進事業」。特に子どもの小さい頃から福祉に関心を持ってもらえるような人づくりをしていきたいということで、津市内の社協 10 支部の各担当から学校の先生、その他教育関係の方々を含め協同で子どもさん向けの福祉教育を重視してやっていきたいと考えています。

三点目に「コミュニティソーシャルワーカー (CSW) の養成」です。NHKのドラマ『サイレントブア』で描かれたように、地域の様々な問題に対応できるキャリアを持った職員をこれから育成していきたいと考えております。それと「広報・啓発事業」はあらゆるマスメディアに対して社協という名前を入れて、社協を知っていただきたいと思っ

ています。私も社協に入った時に地元の社協ってどこになるのか分からなかったので、毎月広報を作っ

ていこうかということで合併前には「社協はこんなことをしています」と毎月毎月発行をしていました。合併後は年に 4、5 回という発行になっておりますが、これからも住民の皆さんや関係の方々に発信できるようなものにしていかないといけないと広報・啓発事業にも力を入れて参りたいと思っ



まとめたものになります。声なき声へのアプローチ、アウトリーチというか支援できる職員の育成、そしてその中で地域のニーズとかを発見して地域資源を開発していくといったところに持っていきたいというふうに思います。合わせて最近よく言われる伴走的な支援についても進めて参りたいと思います。

一人暮らしの高齢者の世帯があれば小地区単位で犬の散歩の時にでもそういう方に声掛けをする。あるいは自治会で毎年4回くらい清掃活動で公園の掃除などをしている際に、ちょっとした交流というかコーヒータイムのようなものを自治会単位で30分でも結構です。話し合う機会を設けていく。こうしたことから人と人のつながりが出てくるんじゃないか。

第2次の地域福祉活動計画は今日参加していただいた方々のご協力もいただきながら地域の皆様方と一緒に進めて参りたいと思います。何分社協の職員は各支部に数名2、3人しかいない状況でやっておりますので、民生委員さんや自治会長さんなどをはじめ関係の皆さんにご協力いただいで進めていかないと地域福祉、声なき声へのアプローチはできないのではと感じております。是非ともみなさんのご支援ご協力をお願いしたいと思っています。

#### <山口>

田中さんありがとうございました。トップバッターで広い意味で地域福祉の事務局を担っている津市社協ついて報告をいただきました。

私のほうから質問です。まず津市の社協は最初にあったように合併して8年9年経ってようやく落ち着いてこれたという話がありました。合併の中で苦勞して頑張ってきた田中課長の合併話というか合併で苦勞してきて今ようやくこんな状態ですというような話がありましたらご披露をお願いします。多くの社協は合併も吸収合併で済んだのでよかったですけれど、おそらく津市の社協の苦勞は並大抵ではなかったと思うのでこの辺り一言。

最後に、声なき声へのアプローチということで田中課長のところでうちはこんな特徴あるよ、こんなことも考えているということがあれば一言加えてください。合併苦勞話と声なき声へのアプローチについてももう一声お願いします。

#### <田中>

平成18年の1月4日に津市社協は合併しました。10の市町村で美杉から河芸の方まで含めて合併しました。合併したときに私も合併協議会の委員というか私は一志地区でしたので参加しているいろんなことを言わせてもらいました。対等合併ということでしたが、やはり大きい旧津市社協さんなどに

うしても吸収と言ったら悪いですが、そんなような状況があったかなと思います。ですので地域における細かなサービスというのはそれぞれ郡部の方ではできていたところが、財政的なところもあって停滞しているかなというところでは。

でも何とかできないかと復活を目指してこれから職員一同頑張っていくといけません。それから声なき声へのアプローチということで私も権利擁護などのケースで思うのは、やはりその方へのアプローチだけでは解決できないケースというのが出てきております。その方へいろいろするまでには家族さんとの関係とか家族さんでも精神障がいをお持ちの方もおられるので、本人だけをみていると虐待とかの場合は家族から本人に向けられている場合もあります。

本人さんだけで解決することもあります。やはりいろんな環境、家族の問題、本人の問題も含めていろんなところからアプローチして解決しないといけないケースが多くなってきているように感じています。こういったところにアウトリーチで連携、協同、いろんな関係団体が協力していかないといけないなと思います。

#### <山口>

田中さんありがとうございました。社協の田中さんのほうからは大きな町づくりの計画を作って合併して10の社協が一つになったのでやりにくさもあるけれどもそこは夢をみて進めているという話がありました。声なき声へのアプローチは一人ではできないという話でした。

では、2番目の報告青木幸枝さんの登場です。エスペランサの代表で元小学校の教諭でいらっしゃいます。青木さんを拍手でお迎えください。

#### <青木>

みなさんこんにちは。エスペランサの青木と申します。どうぞよろしく申し上げます。

私は今エスペランサという市民グループをやっているんですが、この3月まで小学校の教諭をしていました。

教諭をしながらの活動ということで十分なことをできていない、しかし小学校の教諭というのがまず第一で大事だからという言い訳をしていたんですが、この3月にそれもなくなりましたのでこれでいいのかわいのかという自問自答を繰り返しながらなかなか進展していません。そんな思いも持ちつつ今日はお話をさせていただきます。

初めにちょっとお断りをさせていただきます。資料の「日系定住外国人施策に関する行動計画」というのが2009年3

月 31 日になっているんですが 2011 年のことですのでご確認ください。



今からさせていただきお話、私は 35 年間小学校で教諭として勤めてきたんですけど、2001 年から津市の千里ヶ丘小学校に 8 年勤務しました。その 8 年のうちの残り 3 年ほどを外国につながる子どもたちの担当者として勤務しました。主にその頃の出来事をお話しさせていただきます。

2008 年度ですので 2009 年の 3 月に千里ヶ丘小学校を去ったわけですが、その時にエスペランサを設立しました。

この資料は三重県の外国人登録者数です。平成になってからずっと右肩上がりに増えています。そして 2008 年のリーマンショックの頃から減っています。ピークの頃には 5 万人を超えていました。千里ヶ丘小学校にも同じような傾向がありました。

1989 年に出入国管理法が改正され 1990 年から施行されたわけですけど、日系 3 世までの人々に定住者という在留資格を与えて日本で自由に働いていいよというふうになりました。これは日本の労働人口が減ったために産業界からの強い要請があってそのように改正されました。

その改正に深く関わられた坂中さんが書かれたものをみますと、産業界から矢のような催促があったと書かれております。ここにもなぜ法改正がなされたかという背景が強く表れていると思います。これは最近のものが無かったので 2012 年のものなのですが三重県の小中高の日本語指導が必要な外国人児童生徒の数が 1700 人です。今もこれに近い数だと思います。

この写真は私が千里ヶ丘小学校にいた時に会った外国につながる子どもたちです。一番最後の年に 64 名いました。これで全員ではないですが顔をみていただけるといろんな国の子がいるんだなと思っていただけだと思います。

私は「外国につながる子ども」という言い方を今しました。「外国人の子ども」という言い方をしませんでした。そこに

はわけがあります。「外国人の子ども」と言ってしまうと、資料の網掛けの部分だけになってしまうんです。「日本国籍を持たない子ども」なんです。

しかし、実際に子どもたちを見ると、日本国籍は持っているんですけど、お父さんもお母さんもブラジルで育てて日本語が十分に話せない。子どもは日本で育ち日本で育って日本語もちゃんと喋れるんだけど、身体的特徴をお父さんから受け継いでその身体的特徴の為に差別を受けた子どもなど、網掛けのところよりも網掛けから外れたところの子どもを大事にしないといけないような事情がたくさん生まれました。なので、その子たちを含んだ言葉が何かないかな？と探して探して「外国につながる子ども」という言葉に出会いましたのでこれだ！とこれならすべての子どもが含まれるということで使うようになりました。

今は県議会でも使っていただいていますし、役所の言葉などにも使っていただいています。外国につながる子どもたちに出会って本当に今まで見えてなかった部分、日本で本当にこんなことがあるの？ということにいっぱい出会いました。

いろんな問題があるんですが、整理するこの 3 つになるのかなと思います。「人格の尊重」の問題、「教育権の保障」の問題、「生活権の保障」の問題。

この根底にあるのは外国から来た人を労働者としては見ているんだけど生活者として見る、その視点が弱い。これに尽きるんじゃないかなと思いました。

担当していた時に外国につながる子どもたちが週に一度集まる時間があるんですが、日本の友達にわかってほしいことを自分たちで訴えかける時間を作っていない？とみんなが口で言って全校で考えるそんな時間を作っていこうと言ったときに「一番言いたいことは何？」って聞いたらみんな殆ど一致したのが「誰かひとり外国人が悪いことをしたら外国人が悪いとひとまとめに言うこと」。これが「絶対に嫌だ」と。「誰かが犯罪を犯したら外国人が悪い」になってしまう。「日本人が犯罪を犯しても日本人が悪いって言わないんじゃないの、なんで僕たちは一人が悪いことをしたらそう言われるの？それはやめてほしい」ということを口々に言いました。

特に酷かったのが 2005 年にペルー人の男性が小 1 の女の子を広島で殺した事件がありました。その容疑者が鈴鹿市で逮捕されました。そして小学校に通っている子どもの中に「家のお母さんあの人と知り合いなの」という子がいました。「先生ヤバイよな？俺たち差別されるよな？」と心配になって言いに来た子もいます。それから実際に近くの県営住宅に住んでいる日本の人から「あんたたちは、外国人だから気をつけな」と言われ「なんで？私たちに何か困ったことが起きるの？」とその言葉ですごく不安になった子がいます。

それからクラスで「外国人あんなことをして悪いよな」と言われ、ペルーにつながる子どもがいたんですが「僕がペルーにつながる子どもだと知っていながら外国人悪いて僕の目の前で言うんだ」「僕もペルー人の血が流れていてそれを黙って聞いている僕ってつらいんですよ」と言う子もいます。

そんなことを言っていたら職員が“2ちゃんねる”のなかに「仇をとれ」という書き込みがあったと言い、これは「日本人の子どもが殺されたんだから今度は外国人の子どもをやっつしまえ」ということです。

まさかそんなことは起こらないだろうとは思いましたが、実際チマチョゴリが引き裂かれるなんて事件もありましたので起こらないとも限らない。当分は人混みに行くのを避けた方がいいということで子どもに酷いことだけれども、でも子供には伝えようということになりました。集めて話しました。「仇をとれってことがネットに書いてあったのだけれど分かる？」と。そんな事分かりませんか？それは日本人の子どもが殺されたから反対に外国人の子どもを殺してしまえということなのと言った途端に広いホールでしたが子どもたちの悲鳴みたいなのが響きました。その声は未だに忘れることができません。

このことを全校で問題として考えようと言ったときに5年生の女の子が「私が言う、私はスピーチできる」と言ってスピーチをしてくれました。全校の子どもの前、保護者の前、地域からも来ていただいて皆さんの前で発表しました。

それを聞いていたPTAの役員の人がこれは子どもの問題じゃないということで広報に載せてくれました。広報に載せてもらったのでこれは使えると思ってそれをもとに親子で話し合いをしてくださいとお願いをしました。親子で話し合いをされたらどのようなお話をされたか学校にお手紙としてあげただけませんか？というお願いをしました。

そうしたら234通の手紙が届きました。これは大人の問題、大人が差別をしている。だから子供が人のしたことで胸を痛めているんだ、私たちが考えていけないといけないことだという声をたくさんいただきました。次の年になって「去年はこうだったね、今年はどうする」と聞くと、また同じことを言うんです。しばらくはみんなひとまとめて「外国人」とするのはやめて欲しい！というのが願いです。でもそんな取り組みを続けていたらいつの間にか学校の中で外国人としてひとまとめに言うことがすーっと消えていきました。やはり積み重ねの力だなということを実感しました。

次に教育権と生活権の話をしていただきます。自動車運転免許についてです。自動車運転免許は外国人が日本で運転する方法が3つあります。日本で日本人と同じように取得する方法、国際免許で運転する方法、外国で取った免許を日本の免許に切り替えて運転する方法です。

1つ目はどれくらいの人が取っているか調べてみたら、通訳で食べていける程の言語能力を持っている人でないと受かってないということが分かりました。

そして2つ目なんですがこれは無免許運転の抜け道に国際免許が使われるようになったため、法改正がなされて取得した国に3か月以上滞在したという証明がない限り日本で運転してはならないということになったんです。ですからこれは事実上無理になりました。

そうすると大部分の外国人にとって免許を手に入れるためには、自分の国で免許を取って日本の免許に切り替えるということのみです。ですがこれが子どもたちにももの凄く悪影響を及ぼしているということがだんだん分かってきました。

保護者が子どもを連れて帰った場合に低学年の子どもであつたら免許を取って3か月滞在して切り替えですので最低5か月の滞在になりますとその間に日本語を全部忘れてしまいます。クラスの友達と同じように授業を受けてこの調子でいけば無理なく高校に通えると思っていた子どもが日本語をすっかり忘れて帰ってくるわけです。5か月間抜けた間の授業をするだけでは済まない。そんなものでは追いつかないもの凄く損失があるわけなんです。免許は大事だけれど生活を便利にする道具じゃないのか。その道具の為に子どもの将来がこんなにダメージを受けているのはどうなんだろうかと思いました。

それからそういうことがだんだん分かってくと親戚に子どもを預けて帰国して免許を取得してくるという保護者が出てきました。でも低学年の子どもが長期に保護者がいない状況だと精神的に不安定になって、おばちゃんに逆らって逆らって宿題をしなさいと言ってもしない、それから洗濯機のホースを抜いて洗濯機の汚れた水をアパート中にパァーッと広げてしまっておばちゃんもどうしていいか分からず泣いているという状態も出てきました。

免許の為に子どもが犠牲になっている。これは何とかしなくてははいけない。何とかすると私にはそんな力がないしこれは議員さんに頼むしかないかなと思っても知っている議員さんはいないし。

なので、ネットで探したら「多文化共生を考える議員の会」というものが発足したということが載っていました。この方たちにどうしたら会えるんだろうと思っていたらシンポジウムがあって自由参加でしたので私も参加して発言しました。子どもたちの問題を思いっきり発言したら事務局の方が声をかけて下さって議員さんたちに聞いてもらう機会を作ってくださいました。そうしたら早速、翌日から議員さんたちは動いて下さいました。そしてその事務局が外国人とのパートナーシップを考えるシンポジウムというものを開いて下さって議員さん警察の方、報道関係者の方、それから私たち教員な

いろいろな人を集めて免許について考えるそういう会を開いて下さいました。ここでも子どもたちの実情を訴えました。

それから大人も当然頑張らないといけないんですが、子どもの頑張りというのは私たちの頑張りの何倍も効果を生みますので、すぐお母さんが困っていた子どもに「全校の前で言わない？」と言いました。すごくシャイな子どもで「僕恥ずかしい」と言っていたんですが、最後は「お母さんのために頑張る」と言って日本語で読むのは楽しく読んでいましたので、毎日毎日残って練習して発表しました。全校の前にクラスで発表したんですが、クラスで免許を取るのにそんなに苦労していると聞いた子どもたちが「え、免許って簡単に取れるんじゃないの？そんなに大変だったのか」「家のお母さんたちそんなこと知らないし、僕たちがお母さんたち言わないといけないんじゃない」と言って子どもたちが保護者の前で自分たちが調べたことを発信してくれました。

そんなことしているうちに議員さんたちが動いて下さって、まず英語でテストがスタートしました。英語が話せる方や英語が分かる方には良いですけど同じ外国語の人でもポルトガル語の方にはやっぱり無理です。私たちが同じ漢字なんだから中国語で受けてみなと言われてもそれは無理ですよ。それと同じようなことなんですよ。やっぱりポルトガル語じゃないとダメ。

ということでまたどんどん訴える機会を作っていこうと今度は先ほどの子の妹です。お兄ちゃんも頑張ったから「私もお母さんのために頑張る」と言ってイベントでスピーチをしました。そのあとに署名活動もしました。

イベント会場の一番風上に店を出してポリビア料理の肉料理を焼いてもらったんですね。そうしたら美味しそうな煙がすーっと流れて長蛇の列です。暇そうに待っている列をみてチャンスと署名をお願いしたら皆さん本当に快く署名してくれました。そこに来ていたある日本の子どもなんですが急に姿が見えなくなったのでどこに行ったのかな？と思っていたら頼みもしないのにチラシを持って「お願いします。お願いします。」と会場を歩いてくれたんですよ。小学校2年生の子どもなんですがそれがとても嬉しかったです。

この写真はまた別の機会に署名運動をしたものです。そういうことをしていましたら、議員さんが民主党政権になり、文科省の副大臣になられまして、その方が免許の問題について各省庁を横断する会議を作るから子どもの問題も絶対にやるからと約束してくださいました。

その約束通りに話題にして下さって、「外国語の学科試験を推進する」という一文を入れていただきました。

その一文の効果は絶大で警察庁が英語、ポルトガル語、中国語の問題を作って各都道府県に配りました。それからちょっと間は空いたんですが全国で第3番目に三重県も実施するということが決まりました。ちょうど授業をしていた時でポケットの中に携帯を入れているんですが、ブルブルと何回も震えるのでこれは何かあるなと思って、その後電話をかけたから申請のあったポルトガル語の試験をさせていただくことになりましたと言っていたので、私は喜んで飛び跳ねて職員室に行きました。そしてパーティーをしました。

そのパーティーの時にプレゼンでどんな人が活躍したか紹介したのですが、明るい賑やかな人たちなんですがこの人たちが活躍したんだよという紹介の時にはシーンとなって食べるのも忘れてそのプレゼンに見入っていたんですね。この人たちにとってどれほど大きなことだったのかということが分かりました。

最後に生活の話をさせていただきます。

リーマンショックのあった秋、2008年なんですが、明るい子どもたちなんですが子どもたちの会話の中身がガラッと変わって今まで聞いたことのないような言葉を聞くようになりました。

「お風呂はね、つめたい水なの。あったかい水はないの。こごえる。」「まえはたべものがいっぱいあった。いまはちょっとだけ。」これは1年生の女の子が担任の先生に語った言葉です。ガスを切られてしまった。これはお母さんの仕事がなく、ガス代が払えないそれでもお風呂に入りたいということで、たまにはお風呂に入ろうということで卓上コンロで鍋でお湯を沸かしてお風呂に運んでいるでも確か11月に近い10月でしたので、どんどん冷めていってしまうんですね。

次のお湯が来るまでに冷めていってしまう。だから凍えるという表現を使っています。

「先生、デジタルテレビ7万円で買わへん？」これは6年生の男の子が隣のクラスの担任の先生に言った言葉です。この言葉を聞いて「どういう意味で言ったの？聞いていい？」と言ったら、「父さんがこのままでは日本で生活できなくなる。いつか帰らないといけないだろう」といったので「その時にだれがテレビを買ってくれるのか約束している先生を作っておけば父さんが助かるかと思ってさ」と「父さんがそう言ったの？」「うん。僕が思ってさ」と言っていました。

その他にも「お父さんが『ブラジルへ帰るお金ない。』って言った。」

『弟がほしい。』と言ったら『今はお金がないからだめ。』って言われた。」これは2年生の子です。

日本語を学習するときに子どもが教室にやってくるんですけど、最初の方は自由なお喋りの時間にするんです。その時に楽しいながらも一所懸命自分の使える日本語でお話をし

てくれるんです。この子は今までは楽しいお話ばかりしていたんですけれど、ある日突然こんなことを言いました。子どもたちからも保護者がクビになったクビになったという話しがどんどん聞こえてきます。大変な状況になっていました。

なので子どもたちが集まった時にとにかく声を上げよう、大変なことが起こったら自分だけで抱え込まない。先生たちにできることが限られていることは分かっているけれどできることはするから、たとえ何もできなくてもみんなで共有すればちょっとは楽になるからとにかく声を出そうということをお互いに言いました。

そうしたら早速B君という子が私のところに来て、「先生、お願いだからA君の家助けてくれへん。」と言うのです。

どういうことかと聞いたらA君というのは私の知らない中学生なんですけれど、お父さんがクビになった、お母さんが入院した。すごくお金がかかってもうお金がない。お母さんがブラジルのお菓子を作ってそれを売るでも売れないみんな同じことを考えますから、同じものばかりなんです。売れるはずないですよ。それを聞いて私たちが会議に行くときに100人集まる会議なら100個注文して差入れとって持って行ったり、校長もそれを聞いたら校長会に行くときにケーキを注文したりですかそんなことで支援するようになりました。

そんなA君の家を心配していたB君がある日こんなことを言いました。「先生、母さん、どういうふうにくビになったか知ってる？会社に行くと、着替えようと思ってロッカー開けたら、クビやって紙が入ったって。そんなないよなあ。母さんは怒りもせんけど、おれは腹が立つ。」と言いました。彼の家も職を失いました。

それからあるおばあさんが学校に相談にみえました。ここは孫娘をお祖父さんお祖母さんが育てている家庭です。「この子を守るためには、私は盗みでも何でもします。そんなことが悪いことぐらいわかっているし、そうすれば私がどういう社会的制裁を受けるかもわかっています。でもそれしか方法がないんです。仕事して働きたいんです。今はそれができません。この歳になると仕事をまわしてもらえないんです。屈辱ばかりです。」と涙をボロボロ流して言われるんですね。

そのおばあさんはごめんなさいごめんなさいと謝るんです。「私は冷静に話をしようと思うの、でも勝手に涙が流れてしまうごめんなさいごめんなさい」と最後まで謝り通しました。

いろんな人にこの現状を発信しようということで客観的な材料がいるということで調査をしました。そうしたら家族の中で解雇された人がいる外国につながる子どもの家庭は

52%、それから生活保護の基準以下という家庭を知りたくても生活保護という言葉は分からないので食べ物や生活用品を買うのにも困っているという設問で聞きました。

そうしたら23%、1/4の家庭がそうだとということが分かりました。初めは雇用対策事業を見つけてはポルトガル語に訳していたんですが、日本語が話せない、日本語が書けない、外国人はいらないと言われ、私たちが訳して配ったものから就職できた人は一人もいませんでした。

これはもう生活保護しかないということでポルトガル語の生活保護の案内を配ろうとしましたが、三重県で探したらありませんでした。外国人の多い豊田市にはあるだろうと思いましたがありませんでした。岐阜県もありませんでした。いっぱい探しましたがありません。やっと一つ見つかったのが埼玉県の志木市だけでこれを配りました。しかし結果的に生活保護を利用できたのはほんの数人だけでした。こんなのを待たない、私たちがやるしかないと思いました。

私はこの人たちが働いた税金で食べている。学校と言う組織の中でどれだけ調査をしても声を上げて何も好転しない。だったら自分たちでやるしかないよということで、先生たちに「お米持って来て」「家に余っている洗剤持って来て」「何でもいくつでも持って来て」と声をかけました。

そうしてエスペランサを設立してそういうものを配る活動を始めました。それから履歴書を書かないと就職ができない、でも日本語で書いたことのない人たちです。履歴書の書き方講習だとか情報提供などを行いました。今は仕事がある人がほとんどです。でも「もうありがとう大丈夫」と言って去っていった人も多いです。そして今も支援を続けている人もいます。ほとんどがひとり親家庭、特に母子家庭。

それから健康を害してしまった人、例えば膝の怪我なので長時間の立ち仕事がつらい人、そのような人たちです。

この写真はお米を寄付に来て分けている様子です。これはボランティアでお米を分ける作業に来てくれている子どもたちです。このじゃがいもは地域の方からいただきました。この玉ねぎは隣の学校の子どもたちが総合学習で作ったものをいただきました。国児学園の子どもたちが作った野菜がいっぱい届きました。こちらは社協関係の方が寄付して下さいました。先ほど言いましたように職のない人はほとんどいなくなりました。

でも、この資料でも正規雇用というものはこの青いラインです。今の世の中というのは椅子取りゲームで安定した椅子と2本の足しかない不安定な椅子と椅子取りゲームなんです。誰かが安定した椅子を取ってしまったらちょっとバランスを崩したらバタンと倒れるそんな椅子しか残っていないんです。そんな世の中だとすごく感じています。もう生活

保護しかないというくらいだと難しいですが、ちょっとだけ支援してくれれば頑張れるよというのであれば、お米だとか食べ物を持って行きます。

生活支援、エスペランサで検索してもらったらホームページが出てきます。連絡先、メールアドレスもありますので情報をいただきたいと思います。

私たちは今、モノを配っているんですけど、もの凄い元気をもらっています。

あるお父さんは松阪まで仕事を探しに行き日焼けで真っ赤になって帰ってきました。これは自転車です。松阪まで仕事を探しに行き、松阪で外国人はいらないと言われてまた帰ってきて。往復40キロくらいですよ。真っ赤になって、でもニコッと笑って「明日また別のところに行くさ」と言っています。それからこの子はお父さんが早くに家を出るために下の子まだ赤ちゃんですね。この子を面倒見ながら通学団長の仕事をしている。だからこの通学団の写真の先頭は赤ちゃんなんです。こんな子どももいました。それから仕事で怪我をしてしまって私が心配していると、ニコッと笑って「仕方ないね。がんばりましょう」と言うペルー人のお母さんもいました。

その話を不況からやっと出てきた日本人のお母さんに言ったら「すごいよね。そのたくましさを学ばなきゃね」と。この方は原発のために逃げてきた方でやっとお父さんも三重に来てようやく落ち着いた方なんです。その方が「私元気もらえたよ」と言って下さいました。

東日本大震災の時も生活が厳しい外国人の人たちがいっぱいものを持ってきたと聞きました。そんな姿、支援を受けている方は、支援をしている方からパスタをたくさんもらったから一つひとつ持ってくるんです。そしてあそこの家、ミルクが買えないよという情報が入ったので、持って行かないかと思ったらもう持って行くと。「誰が?」「私が」この私と言うのは私たちが支援している人なんです。昔は日本でも困った時はお互いさまと言う言葉がありました。

今はだいぶ死語に近づいていますがそういうことを実践している南米の人に学ばなきゃとすごく感じます。

でも残念なことに、ブラジル人が「ブラジル人はブラジルにいるときは自殺なんて考えもしなかった。でも、日本へ来て自殺と言うことを覚えた」と。あるお母さんに言われた言葉です。もう酷い言葉でこの言葉ももう二度と言わせてはいけなく感じています。

エスペランサは本当に小さな小さなものなんです。でも、繋がりを一つずつ一つずつ繋げていけたらなと思っています。ありがとうございました。

#### <山口>

青木さんありがとうございました。声なき声へのアプローチまさにそのものの報告をいただきました。子どもたちの声を丁寧に拾って行って青木さん。もしエスペランサに寄付をしたいとか何かしたいと思ったら方法はありますか?

#### <青木>

先ほどの電話番号、あるいはネットで見ていただいて連絡していただければとありがたいと思います。

#### <山口>

青木さんが学校現場で感じた、気付いたことをみんなの課題にして取り組まれた。この取り組みにこれからは応援者が集まりますことを期待して大きな拍手で送りたいと思います。どうもありがとうございました。

続いての報告は松岡典子さんの報告です。MCサポートセンターみくみえ代表の松岡さんよろしく申し上げます。

#### <松岡>

皆さんこんにちは。松岡と申します。桑名から参りました。私職業は助産師、産婆さんなんです。産婆さん取りあげ婆とかお婆さんという字が付くんです。まあそれに近い年になってきましたが、資格を取ったのは22歳くらいですね。長年出産の現場におりまして取り上げた子ども赤ちゃんは630人くらいいるんですよ。

そんな中、私が桑名という地域で14年間子育て支援、お母さんを支える活動をしてまいりました。子育て現場でどういことが起こっていてどういう声も埋もれてしまうのか、そして声が出せない対象は母親だけではなくて実は赤ちゃんだったりするわけですよ。子育て不安の実態。

私が一番申し上げたいのは資料の一番左側にある「生後4か月検診で子育てを不安と感じている母親」が半数いるんです。生後3か月で首が据わるもうちょっと落ち着くということに子育ての不安を感じているお母さんたちが半数もいる。

そもそも「赤ちゃん」というものをさわったことも抱っこしたこともないという親。地域で出産とか子育てを見聞きする機会がほとんどないこういう社会的背景にあると思います。

家族を取り巻く社会状況がいくつかあり、核家族化や女性の社会進出、共働き家庭の増加などです。

インターネット・スマホの普及と子育てがどういふうに影響しているか。お母さんたちが声を表に出さないネット社会で生きようとしているという背景もあります。

子育てというのは非常に多様化してきています。親も多様化しています。それはそもそも社会のありようが子育てに反映しています。

我々は14年間電話相談というものを柱にして活動してきました。団体パンフレットに記載の通り、電話相談をやっております。年中無休で15年目です。月に100本くらいかかってきます。やり始めた当初というのは子育ての情報がないからこうした時にどうすればよいか？あるいは離乳食ってどんな感じですか？というような相談が多かったんですね。

しかし最近では先ほどのインターネットの普及という背景もあるんですが、どういうふうになってきたかという情報があまりすぎてどうやっていったらいいかわからない。こういうふうに変わってきたんです。情報というものはあればあるだけいいというものではなくて、たくさんすぎて混乱している。たくさんすぎて自分にあてはまるものが何かということが分からなくて悩んでいるママたちが多いんだということが分かってきました。

それから2番目にあるスーパーの出張子育て支援室は、イオン四日市北店というところで10年、先ほどの社協の方のお話にもありましたがアウトリーチつまり出向いて、待っているだけではいけない出向いて虐待をするお母さんもスーパーへはくるよねということがきっかけで私たちがスーパーでお母さんたちの相談を受けるこんなことも10年やっています。

私たちの団体は資格を持ったもので作っていて全国的にも14年前では非常に珍しかったです。助産師・看護師・管理栄養士そして小児科医・歯科医そして保育士等々が会のメンバーで実は単体でというか助産師だけあるいは看護師だけでNPOを作ろうとは考えなかったんですね。

それはなぜかと言うとお母さんを支えるには多職種が力を合わせないとダメだと思っていたので、15年前から様々な職種の有資格者で団体を作って今に至っています。

皆さんに一つ考えてほしいことがあります。なかなか時間もなく本当は皆さんと考えているといろんな意見が出て面白いところなんですが、なぜお母さんは子供を虐待してしまうのか？出産の現場に600人以上お母さんと立ち会って来て、赤ちゃんが生まれた瞬間まずほとんどのお母さんが無事生まれてよかったと声を出します。涙を流す方もいます。

赤ちゃんの泣き声を聞いて本当に無事生まれてよかったと喜ぶんです。

しかし、それが1年もたたないうちに虐待の加害者、実母が一番多いわけです。なぜそういうふうになってしまうのかを社会に投げかけないといけないなと思っています。

どうしてお母さんあるいは家族は長年子育て期をやり抜くことができるのか？業者が助けてくれた、兄弟が助けてくれたあるいは託児をしてくれる人がいて保育士さんに色々相談に乗ってもらったという事実があります。

ということはこの母親がどうして長い間、大変な子育て期

をやり抜くことができるのかを皆さんが考えることによって、虐待をするお母さんはそれがないんですということが分かります。

家族の支え兄弟の支え精神的な支えかも知れない。あるいはいろいろな子育ての手当てかも知れない。そういうものがないから虐待が起こるんだということに気が付くんです。そうやって考えるとすべての親が虐待をする可能性があるんです。特別な親ではないんです。いろんなこと子育てのストレス、なおかつそれにもう一つ二つストレスが加わると母親というのは子育ての最重度の温暖差という虐待に至ってしまいます。皆さん是非考えていただきたい。



私は助産師なので、母性ということをもう少し考えてみたいと思います。母性を考えた場合に母親が赤ちゃんを出産した瞬間に母性があふれ出ると思われる方？どうでしょうか？一般的には赤ちゃんを産んだら母性はあふれ出ると思うんですが、実は母性というのは後天的に会得するものといわれています。

後天的つまり後からなんです。どういうしくみかこの図を見てみます。お母さん＝母親が赤ちゃんを産みました。そしてこの赤ちゃんに対して生んだ母親がたっぷり溢れでる愛情を注ぐことができるかという実は違うんです。

お母さん自身に愛情がないあるいは少ないと子どもに愛情を与えることができないということが分かっています。そのために私たちはお母さんへの愛、地域や家族さまざまところからお母さんに愛情を与えてお母さんが愛で満たされるという状況で子どもに愛がいく。

順番はこうなんです。先ほど言ったようにお母さんと子どもお母さんがあふれる愛で子どもを育てることがそこだけで起こっていないんです。そもそもお母さん自身がたくさんの人たちの声掛けや頑張っているねといったような励まして、愛情がある程度ないと子どもに与えられない。だからこそ地域や家族の愛をお母さんに与えるということで、母は子どもに愛情を与えることができる状況に至る。

そもそも地域や家族の愛情をお母さんに与えるということは子育てのスタートなんだということを改めて皆さんと共有したいなと思います。ただお母さんは愛情がない場合も初めの頃は相当頑張ります。自分に愛情がないあるいはたくさん問題を抱えていたとしても自分が虐待を受けていたとしても、最初はこの子を絶対私が育てるんだと必ず言います。

ただし、それは長続きしないという状況も背景にあります。連鎖という言葉を使ったりしますけれど、その母親にどういう形で地域や他のところから愛情を与えていくということが重要です。

我々が親支援、母親支援をする理由というのは子どもの育つ環境そのものが特に母親の養育行動に影響を与えてしまう。

だからお母さんを支援するんですということ。子育てについて親、特に母親がSOSを出すことがなかなかできない。困ったらお祖母ちゃんなり友達なりに質問したり相談したりすることがためらわれているんだという現状があります。なぜでしょうか？それについては子育てができないという評価が自分の評価になってしまうからです。

自分の能力が足りないからというふうに皆まわりが評価するのではないかということが怖くて、SOSを出せない。できないことは母親の出来が悪いと思われるという恐怖心があるからハードルが高くなりSOSが出せなくなる。

子育てって初めてなんだからできなくて当たり前なんだよということは誰からも発信されてないですね。

なのでSOSすら出せない親というのは非常に多いと思います。これは連鎖と世代間伝達とも書きましたが、実は女性の性の問題はいろんなことがありましてできちゃった婚、10代後半から20代前半で結婚するきっかけは何かというとききちゃった婚というのが8割を超えています。

年齢が若い方が結婚をする理由は8割を超えてできちゃった婚であるという状況で、経済的不安定からくるDVがあったりして生まれた子ども自身が居場所探しをし、その子どももいくつかの課題を抱え、性的な関係が健全に保てないという段階の中で無防備な性的な関係があつて望まない妊娠があつてまたできちゃった結婚とまわっているというサイクルがあります。

子ども虐待の実態についていえば虐待の背景は孤立化と言われるんです。その孤立というのは社会での孤立ともう一つは家庭内での孤立というのがあります。

夫との関係性、私たち相談100件くらい取っています。とにかく自分で抱えています。夫にすら相談できない。あるいは夫に相談する時間がない、夫が聞いてくれないというものもある。そもそも家庭内で最近イクメンといって男性も子育て

に協力していると言いますが、家庭内での孤立、あるいは嫁姑関係であるとかで孤立してしまっているということです。

虐待件数も7万件を超え、この1件1件に当たり前ですが子どもがいます。被害にあっている子どもがこれだけの数いるんだということを考えないと数字でしか見なくなってしまう。平成25年度に急に件数が増えたのはDVを目撃している子どもたちは被虐待児であるということからその数が加えられたことと、虐待を一人が受けているとしたらその兄弟もカウントするようになって昨年度から件数が増えました。

それから虐待をされて亡くなる子どもの人数と年齢というものをみてまいりますとピンクの部分が全部0歳児なんです。なのでどの年齢も0歳児が半数くらいを占めているということです。

そしてまさに0日目出産してオギャーという声すら出せない赤ちゃんそれで命を絶ってしまう赤ちゃんたちのために私たちはきちんと望まない妊娠の問題、胎児の人権の問題をしっかり考えていく必要があるかなと思います。

そして虐待も心理的虐待は大変子どもたちにダメージを与えるというふうに言われています。無視するこれが一番心理的ダメージが大きいのではないかとされています。「お前なんて生まれてこなければよかった」ということでさえ声を発しかけてもらえる方がまだいいんですね。完全に子どもが存在していると扱っているということですから。兄弟間でも3人兄弟でも1人分だけおやつケーキを買って来ないということも心理的な虐待になります。

私たちが一番気になっているのは表の一番下で過度に子どもの発達で早くできることを押し付ける。早くトイレトレーニングをし、早くおむつを外す1歳くらいからやっているお母さんもいます。子どもは時間をかけていろいろ発達しているのにこういう時代だから早くできることがいいことでゆっくりしていることは悪いことになっているんですね。

そういうことも実は子どもにとっては心理的な発達が歪められたというような影響を及ぼすんだということになります。

スマートフォンでの子育てこれを話し出すと長いんですが、あやすこともそう、ガラガラのアプリがあるのをご存知ですか？子どもがなくとお母さんはさっさとアプリを出してあやすんです。絵本もそうです。子どもに小さいタブレットを持たせてペロップロッと1歳半くらいでタブレットで絵本を見るんです。面白いので夢中になりますよね。

子育て支援センターの先生のところそんな赤ちゃんが行って絵本を一緒に読もうねと言うんですが、タブレットの要領で人差し指で絵本をめくるんです。当然うまくめくれない



ですよね。タブレットだと人差し指でめくれるんだけど実際の絵本はそうはいかなくてギャーッとパニックになって泣くんです。先生は本当に深刻だとおっしゃっていました。小児科医もタブレットやスマートフォンをさせないでと強調している時代になりました。スマートフォンをお母さんが見ている時間帯、子育ての半分以上はずっとスマートフォンです。

子どもと微笑みあう、脳の方も前頭前野を発達させるためにたくさん声掛けや目と目を見ろということをはほとんどされてない子どもたちこれからの発達にどう影響が及ぶのか非常に懸念されています。そういうもので子育てはさせないでという小児科医会のポスターも作りました。

そして家族の子から地域の子もへということで子育ての社会化をいうこと考えていきたいと私たちは考えています。

子育てをその家族の問題ではなくて地域、社会の子どもであるというように少し地域を広げて接触させましょうというようなことをやっている。

親へのメッセージとしては相談してもいいよ。そしてできなくて当たり前、完ぺきな親はいないんだということをメッセージとして伝えていく。

地域はそれぞれがパズルの1ピースとして必ずそれぞれの役割があります。なので、それぞれがそもそも一つのピースなんだということで一つ一つが役割をきちんとやることによって全体にパズルというものが完成するわけで一つのところが髪を振り乱して頑張ればいいのかというわけではなく、地域社会あるいは市民も一つ一つ役割があるというふうに理解をしていただくといかにというふうに思いました。ご清聴ありがとうございました。

#### <山口>

松岡さんありがとうございました。松岡さんの活動は桑名市に限るわけではなく“みっくみえ”ということは三重県から相談ができるということですね。

松岡さんたちの活動を支えている財源とか行政の支援とかいろいろ教えて下さい。

#### <松岡>

電話相談は昔からボランティアでやっております。

私は助産師でもあるので母乳保育の相談というものをやらさせていただいてそういうもののチップを活動に充てるとか、ちょっと時間がギリギリで申しあげなかったんですが県とか市からのさまざまな委託事業がありまして、出張子育て相談を桑名市の子育て支援センターなど2箇所で作らせていただいたりとか望まない妊娠についての電話相談も三重県と一緒にやらせていただくという中で相談員への時給ということで賄っているという部分もありますのでまた皆さんでできる範囲でご協力いただければと思います。

#### <山口>

皆さんこれからお金の使い方に困ったらこれからの子どもたち赤ちゃんの支援をこういう形でやっている団体があるので知ってもらっておいて、講演の機会があればぜひ松岡さんをお願いして、こういう話しは皆さんもっと知らないといけない。

先ほどの青木さんの話もそうですがみんなに伝える役割が私たちにはあるようなそんな思いで聞いていました。

では、最後に村田さん準備をお願いします。三重ローカルアクトよりそいホットラインの村田さんからの報告です。よりそいホットラインは民主党政権の頃から始まった全国の電話相談です。電話相談でいるんなところからの相談が入るわけですけれど村田さんのところにはどんな相談があるのか声なき声をお聞きください。

#### <村田>

今、山口さんから紹介していただきましたが、あんなに上手によりそいホットラインのことを紹介できないのですごく助かりました。よりそいホットラインというのはそもそもどういうものかということからお話しさせていただきたいと思います。

365日24時間フリーダイヤルで全国のどこからでもかかるという電話相談でかなり繋がりにくいという課題もあるんですが、まず電話相談に電話をかけていただくとかガイダンスが流れます。ガイダンスでその人の困っている番号を選んでいただくということから始まります。

1番が一般の相談として何でも気持ちや生活に困っているなどの問題の相談、2番が外国人専門の相談になります。今現在8か国語対応しています。時間はその場その場でこの言語はこの曜日のこの時間にかけてくださいということになります。3番が女性に関するDV等の相談です。これは女性に対する相談ですので、女性の相談員が対応しています。4番がセクシャルマイノリティの問題ということでここがよりそいホットラインの大きな特色なのかなと私個人的には思います。性的違和だったりどちらか分からないという問題これは誰にも話せないし、逆に簡単に聞いてほしくないという問題なのかなと相談を受けながら感じています。5番が今すぐ死にたいという自殺の相談。そのような相談を受けながら図のようにまず相談員が対応しながら関係性を築き成長しながら一緒に対等な関係でその方の困りごとを一緒に考えるという相談になっています。

ただ、緊急性やどこにもつながっていないという方に対しては近くの地域の相談窓口であったりもっと緊急性がある場合は同行支援や面接支援というものを行っています。

そういったことが生活困窮者自立支援法の先駆けとして電話の総合相談として平成23年の10月から試験的に被災地で行われて平成24年3月11日に全国的にスタートさせていただきました。



去年のデータなんですけれど総コール数が1400万コールの電話が鳴っている状態です。ただ接続率というのを見てほしいんですけど3%を切っているというのが現状です。

ニーズはたくさんあるんだけど実際に相談に繋がる件数というのは少ないという問題があります。

相談の主訴の大分類になるんですが、心とか体の悩みが多いです。これはほとんどの方がまず訴えています。その人間関係の悩みだとかざっと資料を見て参考にしてください。

次にもう少し細分化した主訴の統計を取ってみたいところ圧倒的多数の方が人間関係が要因となる問題を大部分が占めているということが明らかになりました。

先ほどの登壇者の方も常々おっしゃっているように孤立とか孤独とか一人で抱えてしまう、また誰にも相談できないという問題が現実として浮き彫りになってきました。男女比ですが数字的には女性が少し多いかなと。電話がかかってくる年代ここが凄く個人的には大きな要因だなと思って30代40代の方がすごく多いというのが現状で、じゃあこの人たちって電話相談以外にどこに相談に行くんだろうと。ここが今の日本が抱えている大きな問題だろうと思うんです。働いている時間にしか相談窓口は空いていませんで、いつ相談に行くんだろうというのがよりそいホットラインで何となく現実としてわかってきました。なので、相談形態そのものを見直さないといけないということも考えていく必要があるのかなと思います。年代層の問題もあるんですが、6割近くの方が社会的居場所がない社会的居場所というのは仕事に行ってもそれ以外に行く所がないんだとか完全に疾患を抱えている通院しているだとか、一人でゲームをしたりテレビを見るのが楽しみだったり孤立とか社会的なコミュニケーションができないもしくはやれない問題があるのかなと思います。

それと7割近くがよりそいホットラインに入ってくる方と

して見ていただきたいのですが、仕事がないということをお訴えます。この多くの方が何回も転職を繰り返して嫌な思いをしたり逆にいろんなところに相談に行っただけどうまくいかないということをお訴えていて30代はまだつながるし本人も僕はまだ何とかなんと自分の力を訴えます。頑張ってみるというんですが40代になるともうダメかもという相談が多くて50代の男性になるともうダメだと、100件も応募しているのに受からないし、日雇いで賃金をだまされるのかももう死ぬしかないし50代の仕事がないもしくは生活困窮に対する声、相談は切実です。死と直結しているようなイメージもあります。

あとはよりそいホットラインが無料ということもあるかと思うんですが4人に1人が生活保護を受給している方の中で障がいや疾患を抱えながら一生懸命暮らされているという方たくさんいます。3人に2人が何かしらの障がいを抱えている手帳受給の有無にかかわらず社会的な障がいというのも一応概念に入ってきます。

次に三重県の現状ですが、これはお配りした資料のデータと少し違って滋賀県を入れないといけないと思ったので、それをいれたものです。

これをみると三重県は大体滋賀県の電話の本数の5倍くらい多いという状況で折れ線グラフの方は人口当たりの電話の構成比なので三重県が180万の人口だった場合、400万件くらい電話がかかっている状態となります。これは全国的に変な数字で常に上位を占めています。

もう少し大きさに言うと被災地の岩手県がかなり高いのですが残念ながらそこを抜いた月もあります。原因は調べようがないのでわかってないのですが広報がうまくいっているものもあるだろうし、なかなか言いにくいですが行政や保健所からの紹介が少なくありません。

先ほどの数字を細分化して月毎にまとめさせていただいたんですが、10月がボンッと上がっているのは9月に広報をやったからというイメージで3月は大きなシンポジウムをやったので増えている。やっぱり広報を行うとかかかってくる電話の件数に顕著に表れるのかなと思います。

次によりそいホットラインをやっている何でこの人はよりそいホットラインに電話してくるんだろうということを相談員みんなと考える機会をたくさん持っています。その中でいろんなパターンがあって想いと大変さが大きいがゆえにワーンと言ってしまって行政窓口で私のところではありませんと振られるケース。もしくは伝わらないケースそれもあるし相談機関にあそこに行ったらいいよと言われているのに受け側が私じゃないからというパターンもあるし、あとは一回受けておいてまた今度ね、ゆっくり聞くねと言いながらフェード

アウトしていつか消えていく。自己肯定感の高い方は悩んでいる、待っていると文句が言えるんですが、肯定感の低い方はこないなこないなどじーっと待っているんですね。そう言って待っている方は何年でも待つということもホットラインの中から明らかになりました。

それと長期抱え込み。これは相談員へ厳しい言い方ですが、相談員の問題だと思えます。支援者側の問題だと思えます。

お願いしますと言ってできないから、一緒に考えてと言えないから抱え込んでしまうわけですから。相談開始からどういった形で回復していくのかということのも実際によりその相談を入りにして伴走型とよく言いますがいろんな問題を一緒に窓口に行くことが必要なんですがこの窓口は僕と一緒に行ってこの窓口は一人で行ってどうだった？と聞き返しをしながら本人が行く力を奪わないということを大事に考えています。そうすると自信にもつながるし、今度はやってみるといような高い目標設定にもつながるんじゃないかなと。

もう一つ関わり失敗の例としては、失敗の連続で行政否定だったり相談窓口に行っても無理、僕の言葉を聞いてくれないという方がかなりいます。そういう方は2次被害で精神疾患を抱えたり自殺未遂に陥ってしまったり、ひきこもってしまったりという状況になってしまっています。

実際にあった事例で40代の男性。介護職のベテランでいろんな資格も持っている方だったんですが、事業所側からのストレスでパワーハラスメントでもう辞めたいと退職しました。退職してから3か月間雇用保険も貰えないその間、食い繋げないといけないというケースで1か月目で家電とかをみんな売ってしまって、2か月目に首を吊って海にも飛び込もうと何度も波止場に行っただけで済んでいました。そのあとホットラインに電話がかかってきて泣きながら何日も食べてないし所持金も20円くらいと仰ってました。

その場で僕がよりそいホットラインという一面も持ちながら三重ローカルアクトという支援団体をお願いして、その人のところに駆けつけて食糧支援をして食べてもらって少し落ち着いてもらってから生活保護の申請同行と社協の貸付同行をして少し休もうよという話をしました。

そうしたらやはり体に不調を訴えるので心身のケアだったり胃カメラ飲んだら胃にも穴が開いていたので少し休むことを主体に考えて半年くらいゆっくり静養してもらいました。その中で今度は見守り支援という形で2週間に1回くらいどう？という電話を入れながら一緒に目標設定をしながら一時的に保護申請が通ったので保護を受けて今度はどうしようというという話をしました。フォークリフトの免許も持っていらしたのでフォークリフトの会社に行くともう介護の仕事は嫌だと仰いましたので就労に結びつきました。通常ですと

ここで支援は止まってしまうんですがこの後が大事なと個人的に思っています。

就労して定着するまでは電話をしようと約束して1か月おきに電話をしてその後は何かあったらNPOに電話をしてきてねということでかかわりは終結しています。今は半年に1回くらい電話があるんですがいい話を聞かせてくれています。

よりそい的な相談電話ということで一緒に考えるということと対等性を持った関係で上下関係とか指導的とかそういう問題ではなくて相談者が全部教えてくれるのではないかというふうになんとか分かってきました。伴走型のイメージとしてというのが良いのかと思って自立支援法を含めて少しアレンジしてみたんですけど一番外側がゴールもしくはインフォーマルなところとしたら真ん中が伴走者になる支援者、支援機関でどこが真ん中に入ってもいい仕組み作りが三重県でもできたらいいのかなというイメージです。

ただそれをやるにはもう一つ大事だと思うのが支援者を支える新形態というものが一番大事なのかなと。「できません」と言える支援者ってなかなかいないと思うんですね。はなからできませんとは簡単に言うてしまうんですが、抱えたままやっぱできないとは言いにくいのでいろんな連携体制とかが必要んじゃないかと今現場の相談員さんと話しながら感じているところです。こういったものを取り入れながら困窮者自立支援法のお手伝いができればなと感じています。相談員としてかかわって感じてきたこととして一番大事なのは見えない障がい。発達障がいとか軽度知的の子たちってその子の独特なものがあるんですね。

それを社会的な言語でやり取りしても通じないということがよくわかってきて相手の言語でどういう意味で言っているのだろう？と聞くと規則性とか純粹さから分かりやすさというのが分かってきました。なのでその辺は僕たちが色んな意味で相談者を見て偏見しちゃっている部分もあったのかなと今すごく反省をしています。後はアセスメントをしながら電話って限界がありますのでアセスメントをしながら常に相談を組み立てていきながらこぼれてくるものを拾うというイメージで相談員は頑張っています。関わってきて感じた一番大きいことはこの世の中終わっているんじゃないのかというのが正直な実感です。明日は我が身だということも毎日感じます。ご飯が食べれてよかったなとすごく感謝するようになりました。

入口機能である相談窓口。先ほどもお伝えしましたが課題があるんじゃないのか？ということで例えば今前後にいる人に悩みを相談して、と言ってもたぶん無理だろうと思うんですよ。対面性のデメリットも何かあるんじゃないかな？とそこで匿名性のメリットを有効に生かして関係性を作って匿名を外すところまでが匿名性のメリットで、そこから対面性に

変えたら何となくうまくつながるんじゃないかなとそれが今感じている一つの大きな課題かなと思います。

あとは9時5時問題ではないけれど、相談者のニーズに合わせた時間帯であったり相談形態だったりを作っていただくといいかたと、圧倒的に足りないのは何でも相談となると相当いろんな知識を要すること要求されますので人材育成が圧倒的に足りません。ただよりそいホットラインをやっている僕らからいうと素人っぽい集団で専門職半分くらいだったんですが人材育成で1年やればそこそこの支援員になるんじゃないかなということが分かってきました。あとはモヤッターといってこれもネットで開いていただいたらいいんですけど、こういう相談ツールも社会的包括サポートセンターは作っています。

最後にローカルアクトができたそもそもなんですけど僕は個人的にひきこもりの家庭訪問員をしまして、東日本の大震災が起きて半年後に東紀州の大水害が起きたその時に三重県中が東日本に目が向いていて自分のところの県に何もできずにいたので、ひきこもりとかニートの子たちを連れて泥かきに行ってその子たちが泥かきしてありがとうと言われるのに何か心地よかったのかしょっちゅう行くようになって。じゃあこれを何か形にしようとしてTシャツを作って基金活動としてお祭りとかマラソン大会とかで売ったんですね。

そういう出口支援をしたところ10人近く進路が決まって今は全員が働いているという現状もありました。そんなことからいろんなきっかけで人は社会に溶け込んでいくんじゃないかなと感じています。そんな感じで三重ローカルアクト実体はあるんですけど、基本何もしていないというのが現状です。今後ともよりそいホットラインを通じていろんな地域の問題というものを一緒に考える場を作っていけたらなと考えています。ご清聴ありがとうございました。

<山口>

村田さんありがとうございました。まず私から質問、最初のところで電話がつながる率が3%と聞こえたんですがそれはどういう？

<村田>

3%というのはガイダンスは常に流れて何番を選んでくださいまでは流れるんですが、そのあと相談員につながるのが3%です。

<山口>

それはじゃあ例えばガイダンスが流れてセクシャルマイノリティを選びました。

<村田>

それでただ今電話が混み合っています。またお掛け直し下さいが97%。

<山口>

実際困って、そこまでたどり着いてさあ村田さんか誰かが出てくれるかと思ったら97%の人は電話が混み合ってますから後でという状況だと？

<村田>

そうです。

<山口>

それはあまりにも困っている人が多すぎるということなのか？電話を掛ける人が多すぎるのか？

<村田>

その問題もあるし、電話を居場所にしてている人も実際はいますので、そこは僕たち相談員も課題にしています。

<山口>

もう一つは、滋賀も京都もこの取り組みをしていて私も仲間がこの取り組みをしているんですけど、報告会をしてもらったときにこういうふうな貴重な資料をなかなか出せないというふうに彼は言ったんですが、今日のこの資料はすごく貴重な資料だと思いますがオープンにして大丈夫な資料なんですか？

<村田>

これは、僕が独自に作成した部分がほとんどなので、出せる数字だけは出させてもらっています。

<山口>

今日、来られている皆さんは村田さんの報告を聞いて当たり前前に資料をもらわれたかもしれませんがもの凄く貴重な資料です。

これから生活困窮者自立支援法を考えていく上でもの凄く貴重な報告だったと私は感じているんですが、もう一つ質問、今全国の自治体でももちろん三重県も生活困窮者自立支援法の準備をしているところだと思いますが、各自自治体から村田さんに報告とか研修に来てとかどれくらい声がかかったか教えて下さい。

<村田>

県社協ぐらい(笑)あとは津市ですね。ただこれは僕の個人的な責任で申し訳ないんですけど、組織的に今まですごくよりそいの組織が忙しくて三重県で活動できなかったんです。なので10月以降は三重県で動かしてほしいと切実に言って

います。なので一緒に話し合っていたらと思います。

### <山口>

ありがとうございました。村田さんのほうからはよりそいホットラインの電話相談から見えてくる状況をかなり克明にそして全国的にもかなり珍しい報告を今日は頂いたと思いますので拍手で終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

ではみなさん午後は4人からとてもすごい報告をいただきましたので後半の1時間をぜひ有効に過ごしたいと思います。そこで皆さんに今から10分休憩をしますが皆さんの手元に付箋紙が配られたと思います。この付箋紙に誰に何を聞きたいか簡潔に書いてもらえるとありがたいです。

例えば村田さんにお給料いくら？とかねそういうふうなのでもいいですよ。いろいろ突っ込んだ質問を期待しましてこの付箋紙を前の各人の机のところに置いてもらって休憩に入ってください。

\*\*\*\*\* 午後の部-2 \*\*\*\*\*



### <山口>

では、後半の部はじめていききたいと思います。よろしくお願います。

前半の報告の中身が非常に濃かったので三重県でもう少し大きなホールで1000人くらい入れてみんなに伝えないといけないくらいの中身だったなと感じています。社協の全体的なプログラムを使って頑張っていくという話し、それと個別の声なき声を伝える努力を今しているのではなくて5年も10年もずっとしている活動が聞けたわけで皆さんには今回とても得をもらったんじゃないかなと思っていますところ。

今パネラーの皆さんは質問に5,6分でどう答えようかと考えてもらっています。細かなところで全部答えきれないところはありますのでご勘弁ください。そして私はコーディネーター役だと思っていたのですが予期せぬことに私のと

ころにもいっぱい質問が来たのでこれもあとで少し話をします。では、1人10分いかない程度でお願いしましたので話をして最後に私とのやり取りをもう一度させてもらいたいと思います。では、青木さんお願いします。

### <青木>

では、3つの質問に答えます。日本の人の支援、それからエスペランサの現在の活動の様子、それと学校の職員の意識の3つです。

まず日本の人でも困っている人がいるのになぜ外国の方を支援しているのか？これは先ほど言いませんでしたが日本の人の支援も行っています。しかし数は少ないです。結果的にやはり大変な家庭は私の周りに居る人たちの中では外国につながる人たちの割合が高いのでそうなりますが、最初は家庭訪問をして配っていたんです。しかしそれをやっているとどんどん増えていっている時期に必要な人に配りきれないのでそれを止めて公民館に取に来てくださと呼びかけてするようになったんです。その時に日本の方もみえました。社協の方の紹介でいらしゃった方もあります。

それからブラジルの方が大変だったら行くといいよと誘ったケースもあります。今は個々に品物、食べ物などをいただくことがあるんですが、やはりリーマンの時の大変さとは違いますのでそういうものは減っていますのでフードバンクにかなり頼っています。そのフードバンクの活動の私たちと同じようにしている人から聞いた話なんですが、ブラジルの方が外国の人に配っている中で近くに日本人で大変な人がいると知ってブラジルの方が日本人を支援しているということがあったことも数日前に聞きました。それぞれのつながりも外国人限定の支援ではありませんので大事にしていきたいなと思います。

次に現在ですが困っている家庭にお米を渡した時の顔とクッキーを渡した時の表情が全然違うんです。お米だとすごく安堵されます。ですがお米はなかなか入ってこないのが寄付金から買ってお配りするという状況です。

困り度に応じてここは今仕事がなくですごく大変というところにはお米をちょっと多くするとかしています。

それともうひとつ最近の傾向ですが、かつて小学生だった子どもたちが今高校生くらいになって親が50代で仕事なくなってきました。ですから高校生が全日制を止めて働いて自分の生活費も学費も全部自分で払って独り立ちしていかないといけない子がいます。アパートもすごく安いところでもそういうところはセキュリティーも甘いですから不審者がこの間入りました。彼女が出かけている間に部屋に侵入されて

いたらしく帰ってきたところでドアの音がバンとして不審者らしき人が逃げて行ったと、逃げて行ったからよかったですが彼女もその部屋が変わると決意したんですが、彼女にしては大金の違約金が残っているわけです。

通信制の高校に通っているんですが私立で45万円の学費で働きたいだけだとなかなか見つからない。彼女は17歳なんです。18歳になればOKなんだけれどというところが多くてやっと苦勞して見つけたんですけどなかなかうまくいなくて授業料を払えなかったらどうしようという状況ですが何もしなかったら誰も助けてくれないけれど頑張ればいろいろ借りるとかいろいろ方法はあるよという顔どんどん明るくなってきました。

そして学校現場で福祉に取り組む重要性はどれくらい認識されているかということですが、先ほど言いました人格を尊重しない差別的な言動だとかの問題は結構頻繁にやるんですが、生活レベルでの認識は大変だというのは誰でもわかりますでも実際に支援となると…という感じです。

異議を言う先生はいらっしゃいますか？ということについてですが、これはいません。非協力的で何もしてくれない先生はいますが、異議を唱える方はいないです。

#### <山口>

ありがとうございます。

では次に松岡さんよろしくお願します。

#### <松岡>

なるべく全部の質問に答えていきたいと思えます。

少子化と言われていますが相談は増えていますか？という質問です。相談は10年前よりは減っています。当初は1400くらいあったものが1000本弱になっていますので、これは子育てに関してたくさんの支援や相談窓口が増えたことが背景かなと思っています。ただ子どもが一人というお母さんの相談が最も多く、子どもが3,4人いるあるいは2人いるということよりも一人ですという方からの相談が多いというのははっきりしています。

それから、父親はどう子育てにかかわるのがよいとお考えですか？というご質問。特に乳児期については子どもでなく母親を支えていただけると一番いいです。特に声掛け、よくやっているねとか何かできることはない頑張っているねという声かけ。言葉だけで十分だとママたちは座談会をすると仰っているんですね。何かをすることよりは声掛けしてほしいという声が多いです。

年齢が上がっていくと男性女性という役割よりは父親とし

て何ができるかなどを考えられればいいというのが私の考えです。それから相談内容に地域性や年齢など特徴があれば教えて下さいということですが、地域性はほとんどないです。年齢で言えば弱年齢、10代後半から20代前半、それから30代後半から40代の女性、母親からの相談が多くてこの2極化の年齢層からの相談の傾向があるのかなと思います。となるところで年齢が高いから子育てに問題が無いということではなくて、私もキャリアを持ってきた女性が子育てをすると大変な困難に直面することをたくさん見えていますので弱年齢と高年齢の2極化ということになるかと思えます。

子育て支援センターでリフレッシュママのボランティアをなさっている方からです。どのように接したらいいですかというご質問。やはりママたちが主体になるということ意識をなさると一番いいかなと思います。関わりすぎ関与しすぎの関係を作ってしまうといけませんので、そしてもう一つはママの意見をいったんは受け入れていただくといいと思います。受け入れてから具体的にどうしたら良いよというアドバイスをなさると今のママたちは比較的受け入れます。最初から何でその方法なの？という批判になってしまうとなかなか受け入れてくれないかなと思います。

暴力や貧困が連鎖するのはわかりました。望まない妊娠も連鎖するのでしょうか？望まない妊娠については一つの事象、事柄として私はとらえていますので望まない妊娠が世代間連鎖をするかということについては確たる何かがあるわけではありません。ただし傾向として若年者の女性が出産するそしてその子どもが実はまた10代で妊娠するというケースは多いです。わかりますか？若いお母さんの子どもがまた若くして子供を産んでその子どもも若くしてというこれは傾向としてあるのではと思っているので、そうなる若年で妊娠ということでお父さんも若くてそうすると経済的になかなか十分ではないという背景があって、そしてできちゃった婚での離婚率というのは3年以内で4割という情報もあるので、そのへんで家庭が子育てできる環境にはないというのは言えるのではないかと思います。

#### <山口>

松岡さんありがとうございました。松岡さんの経験から現在の子育てママ像がずいぶん私たちに伝わりました。では、続いて村田さんお願いします。

#### <村田>

相談員の人数はどれくらいですか？これは全国いろんな地域差格差があって地域の特性にもよるんですけど、僕がかかっているところは小学校のクラス分くらいです。専門

性、学歴などは必要なのですか？これも一概に必要でないと言いきれません。

僕のイメージなのですが一つのセンターで各専門分野がそれぞれいるのが一番いいんじゃないかと思います。足りない部分を相談員同士が補っていくのが重要じゃないかと思います。相談員のケアについてはどうしていますか？これについては電話相談で聞けない電話というものが相談員にもあると思うんですね。その場合はちょっと相談員室から出てもらって別室で話を聞かせてもらったりなどのケアはしています。

たくさんさんの相談を受けていてネットワークはどうしていますか？これは地道にやる方法と行政機関、社協さんだったり文書を書いてお願いするケース、そしてよりそいホットライン全国で同時にスタッフに回して、全国にいろんなスペシャリストがいるので困った時はその人たちに、例えば僕がこういうケースがあったんだけどどうしたら良いの？ということを相談したりします。

唯一、自慢なのは全国どの県に行っても僕自身がホームレスになったら助けてもらえる自信があります。そういうネットワークがあります。

あと、心が折れるときはあるか？これは折れている暇がない。僕が折れたらいろんなところに波及してしまいますので折れるというイメージがわかりません。

休日は？これはほぼ無いです。

そして、相談員の育成プログラムですが、座学を主体に初年度やったんですが現場の多様化や年齢層もそうですし問題多様なので事例検討を2,3人で密に行うようにしています。その中から失敗事例を含めて、成功事例の検討と両方やっています。あと電話相談員に対する怖さですが、怖くない電話相談なんてないです。「よりそいホットラインです」と電話に出てどんな人からどんな内容の電話が来ているのか分からないので、多少は怖いですが。相談者に対してのご質問ですが、後日相談に対して返答をするのか？ということですが、実は折り返し電話ということも積極的にやっています。

電話だけでは解決しないなという人に対しては、その電話が切れても繋がれるように折り返しの電話をさせてもらってそこで一緒に話して解決に向かったりしています。もう一つは折り返し電話ではなく、電話同行といって相談者から電話を受けて地域の関係機関、保健所とかにこういう状況で困っている人がいるんですが、以前保健所さんに相談に行ったら繋がりがきかず今こういう状態で今その方に電話をかけますから、その訴えのギャップの違いが本人の生き辛さの要因なのでそこによりそってあげて下さいとお願いして両方に対してのフォローを行います。

相談窓口の関係ですが難しさや混乱している人に対してどう対処したらいいのか？これは正解が何かわからないですけど電話を受けた人が抱えて困ったらいいと思います。いっぱい困ってそこを拠点にケース会議を開いたら何とかなるんじゃないかと、対応しなければどこかが同じ状況になるだけです。そこは対応しているいろんな関係機関を巻き込んでケース会議をしようというのが問題解決の近道かなと思います。

高齢者の方で難しいガイダンスに対応できないできないかもしれない人には？ということなんですが、ガイダンスが流れ終わってぼけっとしていたら1番に繋がりますので安心してください。知的などの問題を抱えていて電話ができないんじゃないのかという点については、結構知的の方って数字とか単純なものに執着する方もおられて、実は相談例はかなり多いんです。その中で関係を作りながら療育手帳取得に繋がった案件も少なくありません。お母さんが亡くなってどうしようという方にも1日1日の目標設定をしながら、今日はご飯食べた？とかそういう関わりで社会に溶け込むということを一緒に考えています。

今後については、実は僕自身が障がい当事者であって肩麻痺と軽度言語障害、失語症があるんですね。なのでいろんな意味で高齢者、児童、障がい者やニートとかその辺を区分わけしない一緒に居れるようなグループホームだったり居場所だったり作業所だったりそういったものから逆にリタイヤ層の技術とかを習得しながらいろんな街づくりができるんじゃないかなと。

そして大きな問題、男性のDVはどこに相談したらいいですか？これは1番にかけて下さい。3番に電話するとあなたは男なので話は聞けませんと電話を切られますので1番の相談員と一緒に考えることです。そしてDVの問題の解決って単純に言うとその人を治すのはできないので逃げるか別れるかになるんです。DVをする人を説得しようとしても無理なので、そこを相談者の方とどうバランスを取って解決していくかになります。

#### <山口>

村田さんありがとうございました。村田さんの話を聞きながら村田さんって飄々とした人で謙虚な人だなという印象を受けました。相談を通じていっぱいネットワークを広げただなと思いながら、私が日ごろ相談をやっていた頃の迫力などを感じて凄く素敵だなと思い聞かせてもらいました。

皆さんからの質問に4名の方がお答えいただいたんですが私も質問をもらったので、短時間でですけど3つ答えます。

一つ目財源の質問がありました。大津社協のたくさんの方の活動はどういう財源でやっているのか？私たち職員の給料はほぼ100%行政からの補助金です。ですから社協の職員の給料特に介護保険をやっていない社協などの給料は行政の補助金になります。補助金も行政のほうで何とか減らしたいという思いがあるので、社協の補助金をどう減らすか委託事業にする方法もあるかなと思っていますけれど行政の地域福祉計画にしっかり社協のやっている事業を書き込んでいくというのが私たちのやることです。

それと京阪電車のスライドが出たのであれの広告料はいくらか？というご質問。ちょっとここでは答えにくいんですが答えます。まず京阪電車とタッグを組もうと私が思って京阪電車の部長にうちの職員研修会に来てもらって報告をもらって5千円の謝礼を出して拍手をします。そうするともう京阪電車の部長は私たちと仲良しですよ？そうしてアンケートなどにたくさん素晴らしいことを書きます。そうすると部長は気持ちいいですよ。

そうして何とか京阪電車にラッピングを貼らせてもらいたいというのをあたまで京阪電車の部長が山口さんくらい出せますか？と聞いてきたので、いろいろ考えきつとあれは高いだろうな私は当時係長だったので私が言って上司がOKしてくれる範囲はきつとこれぐらいだろうと思って5万円と言ったんです。フルラッピングで半年5万円ってありえない額なんです。部長は笑って「分かりました。引き受けましょう」とそれから5年間やらせてもらって今年部長が変わって方針転換で来年から100万円かかると言われていますけれど、一瞬考えて断ろうかとも思うんですけどもう少しゆっくり考えて来年もう少し値切って50万円くらいどこかの補助金を取ってこようかなと思っています。

京阪電車のラッピングはものすごく効果があって社協の嘱託職員、臨時職員採用の時にどうして社協の職員になろうかと思ったんですか？と聞くと京阪電車のラッピング見ましてという人が多いのでこれはすごいなと思っています。

2つ目は社協の中の部分間連携はどうしていますか？という質問です。これは多くの社協が抱えている大きな悩みです。権利擁護事業をやっている職員は権利擁護事業のことだけ、介護保険をやっている職員はそれだけになりがちなのでこれ

は全国の社協が抱えている大きな悩みでこのことをどうするかが管理職の力の見せ所でしょう。これだけしか知らないという社協職員をこのこともあのことも知っているという社協職員に仕立てるにはどうするのか？それぞれの社協の力の見せ所かもしれません。

うちの場合は職員6か条というものをみんなで作って毎週みんなでそれを読むということをしています。一番管理職が心掛けないといけないのは職員の意欲をどう引き出すか。そこで3つ目いろんなプロジェクトをどんなふうにしたんですか？という質問があってプロジェクトは予算の中でできるものばかりではないなと思っています。日常の眩きの中から事業が始まることもあります。民間団体の社協の特徴は行政は法律があって予算があって議会があってGOになるわけですが、社協は実験ができるので失敗したらやめたらいいんです。それくらいの気楽さで考えています。そうしてうまくいったら続けたらいい。うまくいかなければ理事会にごめんなさいと謝るという私流でやっています。いろいろ質問をいただきましたけれど社協があって良かったと思っただけには柔軟にやらないとダメだなと。

局長、次長は市のOBですので、このOBの皆さんが頭がどれだけ柔らかくなってもらえるか、全国の社協も頑張れと言いつつ私も村田さんのように飄々と謙虚に話さなくてはいけないなと反省しています。あまり大津以外のところで社協のことを語るには力不足なのでもっともっと謙虚にいかないといけないなと思っています。

今日4人の皆さんと私と機会を持っていたスタッフの皆さんそれと参加していただいたみなさんに感謝をこめて拍手で終わりたいと思います。ありがとうございました。

#### 編集後記

今回の合併号の地研通信は、2014年10月4日(土)の第49回地域問題研究交流集会の講演内容の様子を掲載しています。午前の部は、大津市社会福祉協議会の山口浩次さんによる基調講演「相談からまちづくりへ～がんばらないけどあきらめない～」であり、午後の部のシンポジウムは、「声なき声へのアプローチ～支えあうまちをめざして～」をテーマとして開催されました。ぜひご一読下さい。  
S. T